

The Kosobu Site  
小曾部遺跡

The Minamiuke Site  
南請遺跡

The Kourayanagisako Site  
高良柳迫遺跡

—九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2010

熊本県教育委員会

小曾部遺跡  
南請遺跡  
高良柳迫遺跡

—九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2010

熊本県教育委員会



1. 調査区全景（北より）右側丘陵は宇土半島  
2. 調査区全景（南より）奥の市街地は宇土市

## 序 文

平成23年3月12日をもって九州新幹線が開通しました。九州新幹線の開通は、九州の発展はもとより、熊本県の発展に大きく寄与するものと考えられます。

熊本県教育委員会では、同事業に伴い平成9年に埋蔵文化財の発掘調査を水俣市で着手して以来、県南域から県央、県北域で順次、工事に先立ち埋蔵文化財の保護を目的として、工事により影響を受ける範囲を記録・保存するために発掘調査を実施してきました。

本書で報告をする小曾部遺跡・南詣遺跡・高良柳迫遺跡は、熊本県宇城市不知火町に所在する遺跡です。平成14年度に一部発掘調査に着手し、平成18年まで随時発掘調査を継続し、多くの成果を挙げてきました。宇土半島の基部、海と山の境という地域の特性上、県内でも文化財が最も集中する地域のなかでの発掘調査ということで、調査報告の刊行が待ち望まれていたものです。

調査・整理の結果、当該地域は古墳時代の人々の住居跡を確認することができ、周辺に多く残されている古墳を作った人々の生活痕である可能性が高まりました。

発掘調査は、新幹線工事の特質上、細長くしか調査区を設定できず、遺跡全体の内容が判明した訳ではありませんが、今後この報告書が地域の歴史を語る上で多くの情報を提供できるものと考えています。

最後にこの場を借りて、調査の開始以来各種の便宜をはかっていただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部 九州新幹線建設局を始め、不知火町教育委員会(現・宇城市教育委員会)、宇土市教育委員会、地元関係者など各方面で御援助頂いた関係の皆様方に厚くお礼申しあげます。

平成23年3月31日

熊本県教育長 山本 隆生

小曾部遺跡・南請遺跡・高良柳迫遺跡発掘調査報告  
—九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

目 次

第1章 序言

1. 調査に至る経緯	1
2. 事前照会と予備調査の経緯	1
3. 調査組織	2
4 報告書の作成	3

第2章 調査

1. 調査地域	5
(1) 遺跡の位置	(2) 歴史的背景
(3) 測量	
2. 調査日誌抄	6
A 小曾部遺跡	B 南請遺跡
C 高良柳迫遺跡	

第3章 遺跡の報告

1. 遺構	
(1) 小曾部遺跡	11
①遺跡の概要	②遺構各説
③まとめ	
(2) 南請遺跡	15
①遺跡の概要	②遺構各説
③まとめ	
(3) 高良柳迫遺跡	30
①遺跡の概要	②遺構各説
③まとめ	
2. 遺物	
(1) 小曾部遺跡出土遺物	34
(2) 南請遺跡出土遺物	34
(3) 高良柳迫遺跡出土遺物	38

写真図版

報告書抄録

奥付

## 挿図目次 (Fig.)

- Fig.1 熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡  
Fig.2 小曾部遺跡・南請遺跡・高良柳迫遺跡周辺地形図  
Fig.3 不知火地区地図  
Fig.4 小曾部遺跡1・2区全体図  
Fig.5 小曾部遺跡1区遺構配置図 S=1/300  
Fig.6 小曾部遺跡1区掘立柱建物SB001 平面図と断面図  
Fig.7 小曾部遺跡2区遺構配置図 S=1/200  
Fig.8 南請遺跡全図 S=1/2,000  
Fig.9 南請遺跡1区古墳後期遺構配置図及び土層断面図  
Fig.10 南請遺跡2区遺構配置図及び土層断面図  
Fig.11 南請遺跡3区全体図及び土層断面図  
Fig.12 南請遺跡4区遺構配置図及び土層断面図  
Fig.13 南請遺跡5区古墳後期遺構配置図  
Fig.14 南請遺跡5区掘立柱建物SB001 平面図と断面図  
Fig.15 南請遺跡5区豎穴建物SI003（上）、豎穴建物SI004（下）平面図と断面図  
Fig.16 南請遺跡5区豎穴建物SI005（上）、豎穴建物SI008（下）平面図と断面図  
Fig.17 南請遺跡5区豎穴建物SI009（上）、豎穴建物SI015（下）平面図と断面図  
Fig.18 南請遺跡5区豎穴建物SI016（上）、豎穴建物SI017（下）  
Fig.19 南請遺跡5区豎穴建物SI018 平面図と断面図  
Fig.20 南請遺跡5区土坑SK031 平面図と断面図  
Fig.21 南請遺跡5区土坑SK039 平面図と断面図  
Fig.22 南請遺跡5区土坑SK042・SK043 平面図と断面図  
Fig.23 南請遺跡5区土坑SK049 平面図と断面図  
Fig.24 高良柳迫遺跡遺構配置図及び土層断面図  
Fig.25 高良柳迫遺跡土坑SK001 遺構実測図  
Fig.26 小曾部遺跡2区溝SD006 出土遺物実測図  
Fig.27 南請遺跡1区土坑SK005（1）、SK007（2）、SK011（3）、SK013（4）  
不明遺構SX001（4～6）出土遺物実測図  
Fig.28 南請遺跡1区不明遺構SX001（7・8）、SX002（9・10）  
5区豎穴建物SI003（11～19）出土遺物実測図  
Fig.29 南請遺跡5区豎穴建物SI004（20～22）、SI005（23～27）出土遺物実測図  
Fig.30 南請遺跡5区豎穴建物SI008（28～30）、SI009（31）、SI015（32）、SI016（33）  
SI017（34）、SI018（35～37）出土遺物実測図  
Fig.31 南請遺跡5区土坑SK031（38）、SK039（39）、SK042（40～42）、SK049（43）出土遺物実測図  
Fig.32 高良柳迫遺跡土坑SK001（1・2）、調査区内（3）出土遺物実測図  
Fig.33 高良柳迫遺跡 調査区内出土遺物（鉄器・銅器）実測図

## 表目次 (Tab.)

- Tab.1 九州新幹線（新八代・博多間）建設に伴う宇城地区埋蔵文化財発掘調査一覧  
Tab.2 小曾部遺跡・南請遺跡・高良柳迫遺跡4級基準点測量成果  
Tab.3 遺跡地名表  
Tab.4 小曾部遺跡出土遺物観察表  
Tab.5 南請遺跡出土遺物観察表  
Tab.6 南請遺跡石製品観察表  
Tab.7 高良柳迫遺跡出土遺物観察表  
Tab.8 高良柳迫遺跡鉄器・銅器観察表

## 写真目次 (PL.)

- PL.1 調査区全景（北より）右側丘陵は宇土半島  
調査区全景（南より）奥の市街地は宇土市
- PL.2 小曾部遺跡 1 区完掘状況（南より）
- PL.3 小曾部遺跡 2 区完掘状況（南より）
- PL.4 1. 南請遺跡 1 区古墳後期完掘状況（南より） 2. 南請遺跡 4 区時期不明完掘状況（南より）  
3. 南請遺跡 2.3 区時期不明完掘状況（北より）
- PL.5 南請遺跡 5 区古墳後期完掘状況（俯瞰）
- PL.6 高良柳追跡時期不明完掘状況（北より）
- PL.7 1. 小曾部遺跡 2 区溝 SD006 出土遺物 2. 南請遺跡 1 区土坑 SK011（3）、SK013（4）出土遺物  
3. 南請遺跡 1 区不明遺構 SX001 出土遺物 4. 南請遺跡 1 区不明遺構 SX002 出土遺物
- PL.8 南請遺跡 5 区竪穴建物 SI003 出土遺物
- PL.9 1. 南請遺跡 5 区竪穴建物 SI004 出土遺物 2. 南請遺跡 5 区竪穴建物 SI005 出土遺物
- PL.10 1. 南請遺跡 5 区竪穴建物 SI005 出土遺物 2. 南請遺跡 5 区竪穴建物 SI008 出土遺物  
3. 南請遺跡 5 区竪穴建物 SI009（31）、SI015（32）、SI017（34）出土遺物  
4. 南請遺跡 5 区竪穴建物 SI018 出土遺物
- PL.11 1. 南請遺跡 5 区土坑 SK031（38）、SK039（39）出土遺物  
2. 南請遺跡 5 区土坑 SK042 出土遺物  
3. 南請遺跡 5 区竪穴建物 SI004（21）、SI005（27）出土遺物  
4. 南請遺跡 1 区不明遺構 SX002（10）、5 区土坑 SK042（42）出土遺物（製塙土器）
- PL.12 1. 高良柳追跡土坑 SK001 出土遺物 2. 高良柳追跡土坑 SK001（1）、調査区内（3）出土遺物  
3. 高良柳追跡調査区内出土遺物（鉄器・銅器）



# 小曾部遺跡・南請遺跡・高良柳迫遺跡発掘調査報告

## －九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

### 第Ⅰ章 序言

本書は、九州新幹線建設工事に伴い、平成14年9月17日から平成14年12月27日まで熊本県宇城市不知火町大字高良字柳迫で実施した「高良柳迫遺跡」、平成16年11月1日から平成16年12月10日まで同市不知火町大字小曾部字中請1083-6、1084-3で実施した「小曾部遺跡」、平成18年9月20日から平成18年12月28日まで実施した「南請遺跡」での発掘成果をとりまとめたものである。

遺跡の立地する宇土半島基部に位置する不知火町は、八代海（不知火海）に面し気候温暖な地域でその気候条件を生かし、古くからミカン、ブドウ等の果樹栽培が始まられている。これにより、海を望む丘陵上に存在する古墳の多くが早くから果樹園への転換を受けたため、松合地区「和田原古墳」、永尾地区「西於呂口箱式石棺」等の埋蔵文化財が失われることとなった。

町名である「不知火」の名称は、『日本書紀』に記載のある景行天皇九州平定時のエピソードに由来するところであり、毎年旧暦8月1日の八朔の前後に八代海上に発生する無数の火影にその語源を求めることができる。<sup>〔しらぬい〕</sup>

#### 1 調査に至る経緯

九州新幹線鹿児島ルートは、国民経済の発展及び国民生活領域の拡大ならびに地域の振興を図る目的で「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設されるもので、福岡市から熊本市、鹿児島県川内市を経由し、鹿児島市に至るまでの総延長約249kmの大動脈である。完成により、移動時間の短縮、県内総生産にもたらす経済波及効果及び地域間交流の拡大等、多くのメリットがもたらされることから、各界から早期の開業が望まれている。

当該ルートは昭和48年11月13日に整備計画の決定及び建設の指示がなされた後、昭和61年8月29日に工事実施認可申請がなされたが、その後の経済情勢や社会情勢の変化に伴い、平成3年8月22日に先行して八代～鹿児島間にについて工事実施計画が認可され、同年9月7日に起工した。その後、平成10年3月12日に船小屋～鹿児島間の工事実施計画が認可され、同年6月2日に博多～船小屋間が起工している。現在、平成16年3月13日の新八代～鹿児島中央間の開業を経て、博多～船小屋間について平成23年3月の開業を目指して工事が鋭意進められている。

#### 2 事前照会と予備調査の経緯

熊本県内における九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成9年の日本鉄道建設公団九州新幹線建設局（現：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局（以下、「鉄道建設・運輸機構」と言う。））から、芦北郡津奈木町内における文化財及び埋蔵文化財の予備調査依頼を契機として、熊本県内における新幹線建設に伴う埋蔵文化財の対応が始まった。

今回報告する玉名市内における埋蔵文化財への取り組みは、熊本県南域の調査がほぼ終了し、調査の対象が県央、県北へと移ってきた平成15年度から本格的に着手した。

平成15年度は新八代駅から宇土市域までの予備調査を実施し、不知火町（現、宇城市不知火町）の宇土半島基部の丘陵地で今回報告をする高良柳迫遺跡、南請遺跡、小曾部遺跡等を確認した。

この結果を踏まえ、熊本県教育委員会は、鉄道建設・運輸機構に対し埋蔵文化財の保護について設計変更等、協議を行ったが、新幹線事業の性質から路線変更は不可であるとの回答を得、「記録、保存やむなし」との判断に達し、発掘調査に着手することとなった。

1 不知火町史編纂委員会編「不知火町史」昭和47年3月1日発行

No.	遺跡名	所在地	博多駅からの 新幹線距離	調査面積	調査期間	調査員名	遺跡の年代	主な遺構・遺物
1	小曾部遺跡	宇城市不知火町大字小曾 部字中浦 1083-6, 1084-3	113Km360m 113Km580m	360㎡	H16.11.1 H16.12.10	坂口圭太郎 吉崎・古代・中世	溝 須恵器壺・石製紡錘車	
2	南浦遺跡	宇城市不知火町大字小曾 部字南浦 1409-1, 1409-2	114Km800m 114Km160m	980.37m <sup>2</sup>	H18.9.20 H18.12.28	坂口圭太郎 尾方圭子 坂本圭子	掘立柱建物・堅穴建物、土坑、溝、權列、 土師器・須恵器壺・石製品・製陶土器	
3	高良柳追遺跡	宇城市不知火町大字高良 柳追	114Km240m ~ 114Km360 m	286㎡	H14.9.17 ~ H14.12.27	坂口圭太郎 宇田昌将 和田敏郎	溝、土坑、權列 土師器、須恵器、製塙土器、鉄器 銅製品	

Tab. 1 九州新幹線（新八代・博多間）建設に伴う宇城地区埋蔵文化財発掘調査一覧

### 3 調査組織

以下、各々の発掘調査の責任者と調査担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する。（※は整理非常勤職員）

#### 調査・整理主体 熊本県教育委員会

##### 予備調査 2003 年（平成 15 年度）

調査責任者	文化課長	成瀬烈大
調査総括・指導	教育審議員（課長補佐）	島津義昭
調査指導	主幹（文化財調査第一係長）	高木正文
調査担当者	文化財保護主事	坂口圭太郎

##### 小曾部遺跡発掘調査 2004 年（平成 16 年度）

調査責任者	文化課長	島津義昭
調査総括・指導	課長補佐（文化財調査第一係担当）	高木正文
調査担当者	参事	坂口圭太郎

##### 南浦遺跡発掘調査 2006 年（平成 18 年度）

調査責任者	文化課長	島津義昭
調査総括・指導	課長補佐（文化財調査第一係担当）	高木正文
調査担当者	参事	坂口圭太郎、尾方圭子

##### 高良柳追遺跡発掘調査 2002 年（平成 14 年度）

調査責任者	文化課長	成瀬烈大
調査総括・指導	教育審議員（課長補佐）	島津義昭
調査指導	主幹（文化財調査第一係長）	高木正文
調査担当者	文化財保護主事	坂口圭太郎

#### 整理報告書作成 2010 年（平成 22 年度）

整理責任者	文化課長	小田伸也
整理総括	課長補佐	木崎康弘
整理指導	文化財調査第一係長 文化財資料室長	村崎孝宏 坂田和弘
整理担当者	文化財調査第一係 参事	長谷部善一 唐木ひとみ <sup>※</sup> 稲葉貴子 <sup>※</sup>

#### 調査・整理指導機関及び指導・助言・協力者

独立行政法人国立文化財研究所 奈良文化財研究所、大牟田市教育委員会、みやま市教育委員会

不知火町教育委員会（現・宇城市）、宇土市教育委員会、熊本県立装飾古墳館

植木町教育委員会（現・熊本市）、甲佐町教育委員会

牛鶴 茂 高木恭二 坂井義哉 猪渡真弓 竹田宏司 中原幹彦 増田直人 林田和人

原田範昭 藤本貴仁 西口貴志 西山由美子 横佳克 宮本利邦 宮本千恵子

荒木隆宏 上高原 聰

調査（整理）に伴う委託業務

測量業務一式（遺構実測含む）

株式会社 埋蔵文化財サポートシステム

空中写真撮影 九州航空株式会社

整 理 業 務（一次整理業務、遺構・遺物デジタルトレース、遺物実測（土器・石器））

株式会社 埋蔵文化財サポートシステム

遺物写真撮影 写測エンジニアリング株式会社

4 報告書の作成

報告書の作成は、熊本県文化財資料室（熊本市城南町注目 1667番地）にて実施した。平成21年度に一次整理に着手し、平成22年度に図版作成、原稿執筆をおこなった。発掘調査及び出土遺物の整理業務は文化財調査第一係が担当し、報告書刊行後の資料は文化財資料室で管理している。

（1）本報告書に関する1次整理は一部を業務委託したが、整理の根幹となる遺物選別、撮影時の形状復元等は文化財資料室で実施し、下記の整理作業担当がおこなった。

（班長）石田敦子（副班長）福島典子 小早川隆春 塩田喜美子 今崎光成

田熊敏子 田中裕子 藤井美智子

（2）遺構図の座標値は、平面直角座標系第II系による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海拔高で表す（日本水準原点：H=24.4140m）。なお、2002年4月1日からの改正測量法の施行にともない、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査はすべて日本測地系によっているので、本書の平面座標も日本測地系で表示し、世界側への変換数値も併せて表記した。

（3）発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。

SA（塀・柵・土塁） SB（建物（竪穴建物以外）） SC（廊） SD（溝） SE（井戸） SF（道路） SG（池） SH（広場） SI（竪穴建物） SJ（土器埋納遺構） SK（土坑・貯蔵穴・落とし穴） SL（柱・カマド） SM（盛り土・貝塚） SN（水IH） SP（柱穴・ピット） SS（礎石・葺石・配石） ST（墓・埋葬施設） SU（遺物集積） SW（石垣・防護壁） SX（その他） SY（窯） SZ（古墳・墳丘墓・周溝墓） NR（自然流路）

（4）遺物観察表に記している色調については「新版標準土色帖」1999を使用した。

（5）本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。

（6）註は、各節ごとに末尾にまとめた。

（7）本書の編集は、文化財調査第一係長 村崎孝宏、文化財資料室長 坂田和弘の指導のもと、長谷部がおこない、唐木ひとみ、稲葉貴子、土田みどり、岩下恵美子、築出直美の協力を得た。



Fig.1 熊本県における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した道跡

## 第2章 調査

### 1 調査地域

#### (1) 遺跡の位置

本書で報告する3遺跡は、熊本県のほぼ中央部に位置し、広くは有明海と八代海（不知火海）を隔て天草諸島へと連なる宇土半島の基部南縁に位置する。宇土半島は主峰大岳（標高478m）から派生した幾筋もの丘陵が海岸線近くにまで迫り、その合間に小規模な河川があり、狭小な扇状地が形成されている。大規模な平野は、不知火地区小曾部があるが、その他は近世における干拓平野が大半を占める。

小曾部地区のある平野は、不知火町松崎付近から宇土市伊無田町を経て、椿原町にかけ低地をなす。さまざまな文献には、繩文海進期には海水面の上昇により海水が浸入し、一時に九州島から独立した島になっていたとも言われている。

#### (2) 歴史的背景

本町内での旧石器時代の遺物はいまのところ確認されていない。当該地域では、比較的低地における開発が主であるため、旧石器時代の遺物を有する地形上での調査事例が少ないことがその要因の一つである可能性も考えられる。しかし、当地域から東に位置する松橋町曲野では、後期旧石器時代とされる曲野遺跡が知られている。曲野遺跡から東の地域は九州山地から延びる低丘陵が広がり、城南町（現・熊本市城南町）、甲佐町などで旧石器時代の遺跡を見ることができる。

繩文時代の遺跡は、河口付近を中心に繩文海進前後の時期を中心とする多くの遺跡が知られ、学史に残る発掘調査も数多くおこなわれている。1917年（大正6年）には日本近代考古学の父と呼ばれている濱田耕作氏（京都帝国大学総長）により、宇土市宮庄町「轟貝塚」の発掘調査がおこなわれている。その後、1966年（昭和41年）におこなわれた第6次調査では、慶應義塾大学の江坂輝彌氏らにより貝製腕輪を装着した人骨が出土したほか、多量の土器、石器、骨角器が出土している。近年では、宇土市教育委員会により市内遺跡範囲確認調査事業（国庫補助事業）により、轟貝塚の範囲確認調査（第7.8次調査）がおこなわれている。また、宇土市岩古曾町にも、曾畠式土器（繩文前期）の標識遺跡である曾畠貝塚があり、1958年（昭和33年）に江坂氏を中心とし、調査がおこなわれている。

弥生時代に入ると、宇土市域を中心に調査事例が増加する。遺跡は前期から後期、終末期までの遺物が出土している。同市城山遺跡からは中期の甕棺墓が出土し、この資料をもって、県内はもとより九州でも甕棺埋葬文化のほぼ南限とされている。

古墳時代に入り、当該地域は県内でも前期古墳が多数築かれるなど先進地域の一つであった。前期の首長居館として知られる西岡台遺跡を始め、船載三角縁神獣鏡が出土し、竪穴式石槨に木棺を納める県内最古の前方後円墳とされる城ノ越古墳（全長43.5m）、追ノ上古墳（全長56m）、スリバチ山古墳（全長96m）などの前期の古墳がある。また、竪穴式石槨に舟形石棺を納める向野田古墳（全長90m超）などもある。

後期になると有明海側で天神山古墳（全長110m）が築かれ、松橋台地上には松橋大塚古墳（全長約80m）が築かれる。八代海沿岸では亀崎丘陵上に国越古墳（全長62.5m）が築かれる。それ以後は大規模な前方後円墳は築かれず、小円墳が多数見られることとなる。現在、不知火グラウンドとなっている背後の丘陵上に20基ほどからなる塙原古墳群がある。この古墳群の初期段階で築かれたとされる塙原平古墳は、平成2年と平成4年に発掘調査がおこなわれている。

また、八代海を望む本地域には、横穴式石室奥壁、側壁に線刻画を施す古墳が多く見られることとなる。後期古墳の前方後円墳である国越古墳は、石室には彩色技法を用いた孤文・鍵ノ手文が描かれるが、他は細

1 不知火町史編さん委員会「不知火町史」昭和47年3月1日

近年では、「新宇土市史」宇土市2003 弘田禮一郎「有明海の自然」通史編第1巻を参考にされたい。

2 塙原平古墳発掘調査团・不知火町教育委員会「塙原平古墳」1999

い線画による技法が用いられる。線刻画の主題は船が多く、桂原古墳・塚原1号墳・仮又古墳等、後期の古墳に描かれる。

古代には、八代海側の不知火町西部の長崎に、西海道の一つで肥後と肥前を結ぶ「長崎駅（比定地）」が知られている。

近世には、キリシタン大名小西行長によって宇土城が築城されている。しかし、関ヶ原以降は加藤清正の支配下にて全面改築を経て、清正死後には廃城となっている。その後、宇土地域を含む肥後国は幕末まで細川家の支配下に入ることとなる。

### (3) 測量

3 遺跡とも調査を開始するにあたっては、事前に基準点測量と水準点測量を実施した。基準点は、鉄道建設・運輸機構が工事着工時に設置した1級基準点ならびに3級基準点を基点として設置した。測量成果はそれぞれの調査区平面図中にX・Y表記で明示し反映させていく。

九州新幹線建設工事に伴い使用した基準点は、工事に伴う座標がすべて日本測地系に則っていることから、発掘調査に伴い使用した数値はすべて日本測地による。そのため、下記に日本測地の数字を世界測地に変換した表を示し今後の活用に繋げたい。

遺跡名	点名	日本測地系		世界測地系	
		X座標	Y座標	X座標	Y座標
小曾部遺跡	座標数値No 1	-37885	-31600	-37483.0023	-31821.0100
	座標数値No 2	-38055	-31603	-37683.0037	-31824.0113
南請遺跡	座標数値No 1	-38251	-31585	-37879.0053	-31806.0117
	座標数値No 2	-38363	-31574	-37991.0059	-31795.0119
南請遺跡	座標数値No 3	-38415	-31565	-38043.0069	-31786.0120
	座標数値No 4	-38505	-31555	-38133.0075	-31776.0122
高良柳追遺跡	座標数値No 5	-38605	-31550	-38233.0083	-31771.0126
	座標数値No 1	-38765	-31505	-38393.0107	-31726.0117
	座標数値No 2	-38775	-31505	-38403.0111	-31726.0117

Tab.2 小曾部遺跡・南請遺跡・高良柳追遺跡4級基準点測量成果

3 木下良「季刊 日本古代の道と駅」2009(平成21年)

### 2 日誌抄録

#### A.【小曾部遺跡】

2003年(平成15年)坂口、和田、宇田

1.8 表上剥ぎ開始

1.15 メッシュ机設置

1.17 S001南側溝掘下げ

1.20 S001、S002調査

1.22 3層掘下げ

1.24 4層掘下げ

2.4 調査区中央部6層掘下げ

2.6 調査区南側 4層掘下げ

2.21 調査区北側3層から、宗元通宝出土

3.13 ラジコンヘリにて空撮

3.28 調査機材の搬出、調査終了

2004年(平成16年)坂口、松森、坂本

11.2 4級基準点測量及びメッシュ机設置

11.3 表上剥ぎ後状況の撮影

11.9 4層掘下げ

11.10 S001、S002掘下げ

11.30 調査終了、機材撤収

#### B.【南請遺跡】(坂口・尾方・坂本)

9.26 表上剥ぎ開始

10.3 4級基準点測量及びメッシュ机設置実施

10.11 道構検出を実施。掘立柱建物5棟検出。

10.26 穴立建物3軒検出

10.27 道構調査

11.1 SH005より勾玉出土

11.6 重機を用い、客土を撤去。地山面より遺構を検出

11.13 道構検出

12.1 ラジコンヘリを用い、空撮

12.6 道構実測を業務委託

12.22 調査区実掘状況、写真撮影

12.25 調査終了、機材撤収

#### C.【高良柳追遺跡】

(旧・北園遺跡柳迫) (坂口・和田・宇田)

2002 9.17 事務所設置

9.26~10.2 表上剥ぎ

10.3~4 4級基準点測量及びメッシュ机設置業務

10.7 調査区内、表上除去後写真撮影

10.8 調査区北側上段掘下げ

10.9 調査区上段S001 検出状況写真撮影

10.10 S001 完掘状況撮影

10.18 調査区中央にトレチを設置、振削

10.24 東側の落ち込みから多量に須恵器出土。しかし土は上層の土と同じであるため、遺物の時期とは関係なし

10.28 下段、実測

10.29 調査と並行し、隣接する小曾部地区の試掘を開始

11.7 遺物包含層と見られていた土層は、上部からの流れ込みと判断

11.11 柱穴等、掘下げ(道構であるかは不明)

11.20 上段2層(暗褐色粘質土)より耳環、鉄製留め金具(馬具)出土。

12.2 調査区実掘状況写真撮影

12.5 地形測量 調査は終了。以後、土器の水洗業務

12.13 不知火トンネル北側坑口試掘

12.19 調査機材の撤収

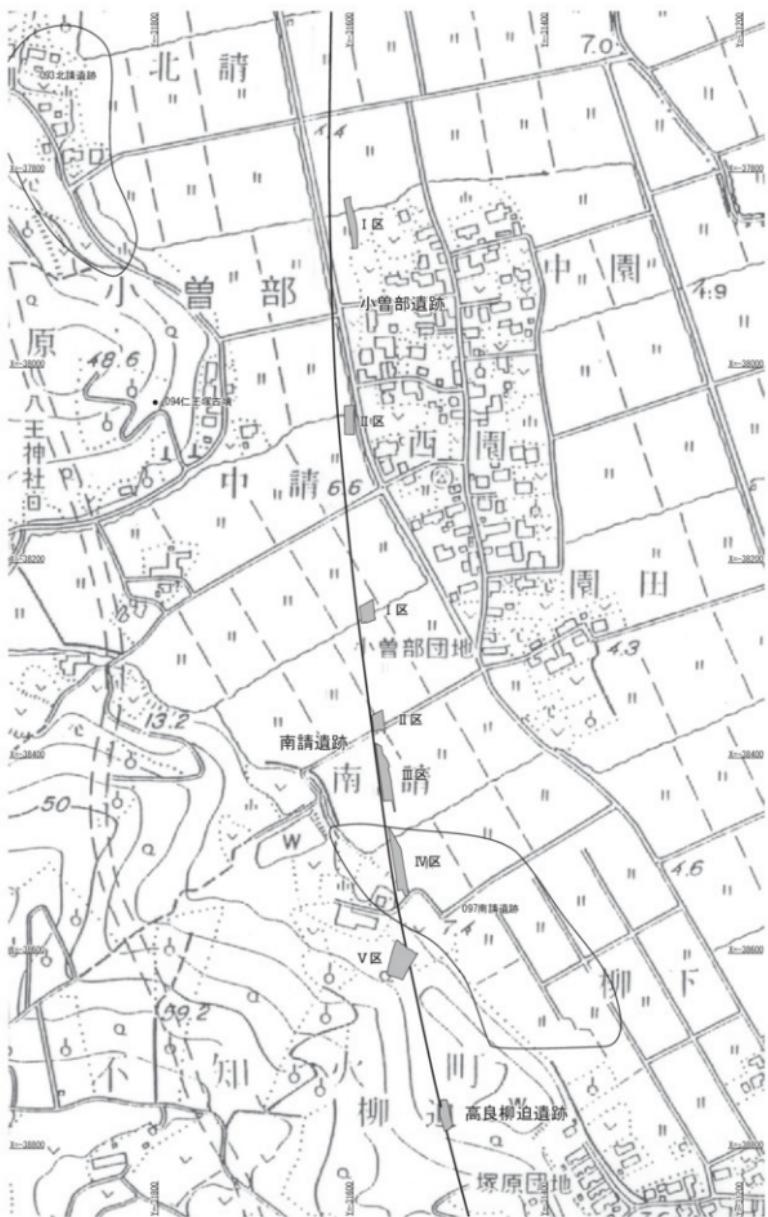


Fig.2 小曾部遺跡・南請遺跡・高良柳迫遺跡周辺地形図



Fig.3 不知火地区遺跡地図

### 第3章 各遺跡の報告

#### 1. 遺構

##### (1) 小曾部遺跡 (Fig.4)

###### ① 遺跡の概要

今回調査を実施した不知火地区の遺跡の中で最も平野中央に位置する遺跡である。宇土半島側から延びている丘陵性台地（不知火丘陵）と宇土市から宇城市松橋町に広がる低丘陵性台地（宇賀岳丘陵）に挟まれた冲積地上に位置する。小曾部、伊牟田の水田地帯が南北に通じ、宇土半島を九州島から分離させる地峡帯となっている。小曾部地区はこの地峡帯のなかで微高地を形成しており、遺跡はそのわずかな高まりに成り立っていたものと考えられる。同一地形上に直径約40m、埴丘高約6mを測る円墳である「北園古墳」が残されている。

調査区は、予備調査で遺構・遺物が確認された範囲を調査区と設定し、遺跡内に2調査区を設定した。調査担当者は坂口圭太郎で、調査期間は平成14年1月6日から平成15年11月30日までである。調査面は、調査時には1区で2面として調査がなされていたが、整理報告時に土層断面の再確認、上下層で分けられて調査されている遺構の理上、遺構の分布状況を勘案した結果、地形の起伏による土層の高低差として、遺構面は上下層とも同一面であると判断し作図した。1区が北側、2区が南側に位置する。

###### ② 遺構各説

###### 1区 (Fig.5)

掘立柱建物 SBOO1 (Fig.6) 溝SD004の上部に建てられたものか、溝を挟み柵列としたものを確認することが出来なかったため、本稿では、並列する柱穴の深度がほぼ一定であること、P1断面に見られる柱痕があったことを窺わせる2段掘り込みがあることなどを考慮し、掘立柱建物として報告する。

3間×1間の規模で長軸方向は3.12m、小口側で1.35mを測る。柱穴間はP1～P3、P5～P7はほぼ同一幅で0.9mであるが、P3～P4、P7～P8間のみはそれぞれ1.32m、1.3mと幅がやや広く置かれている。主軸は本調査区で見られる溝とほぼ同じく、N-72°-Eにおく。

溝SD001 本調査区で検出した遺構はすべて東西に延び、南北に長い調査区を横断し検出した。溝SD001はこのなかで最も幅の広い遺構である。全長7.3m、最大幅3.3m、主軸はN-70°-E。深度は浅く一定しない。上部からの多数の擾乱により切られており、上端の検出ラインはやや不安定である。

遺物の出土はない。



Fig.4 小曾部遺跡1・2区全体図



Fig.5 小曾部遺跡1区遺構配置図 S = 1/300

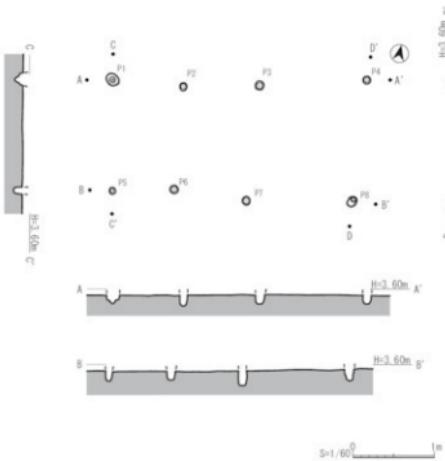


Fig.6 小曾部遺跡1区 挖立柱建物SB001 平面図と断面図

溝SD002 溝SD001と並行し検出した。遺構は調査区の途中で終わっている。全長5.8m、最大幅0.73m、主軸はN-63°-E、深度は溝SD001同様、浅く一定しない。遺物の出土はない。

溝SD003 溝SD002と主軸は同じくN-66°-Eを測る。全長4.8m、最大幅2.8m、深度は10cm。調査区内で浅くなり終わる。遺物の出土はない。

溝SD004 調査区を横断し、溝SD003よりは幅、深度とも規模が大きな遺構。全長5.6m、最大幅0.7m、主軸はこれまでの遺構同様、N-68°-Eを測る。

### 2区 (Fig.7)

本調査区で検出した遺構は2条の溝のみである。本調査区では、溝SD005埋土から古墳時代の遺物を出土している。

溝SD005 調査区を東西に横断する遺構。遺構上端は不安定で広さが一定しない。検出長は5.1m、最大幅は0.9mを測る。主軸はN-89°-E。遺構は浅く、断面は逆台形を呈していたものと見られる。

溝SD006 溝SD005と並行し検出した遺構。西側で一部小遺構との切り合いがあるが、詳細は不明。検出長5.1m、最大幅1.9mを測る。本遺構では、上端・下端とも不安定である。埋土中からは須恵器蓋杯の蓋(1)、紡錘車(2)の2点出土している。

### ③ まとめ

本遺跡の調査の結果、溝と柱穴を確認した。出土した遺物は少なく、生活域であったことを示す遺物はない。遺構は、調査区を横断する溝が主体で埋土状況から排水を目的とした遺構であったと見られる。このことから本遺構は、平野上に広がる生産遺跡であった可能性が高い。

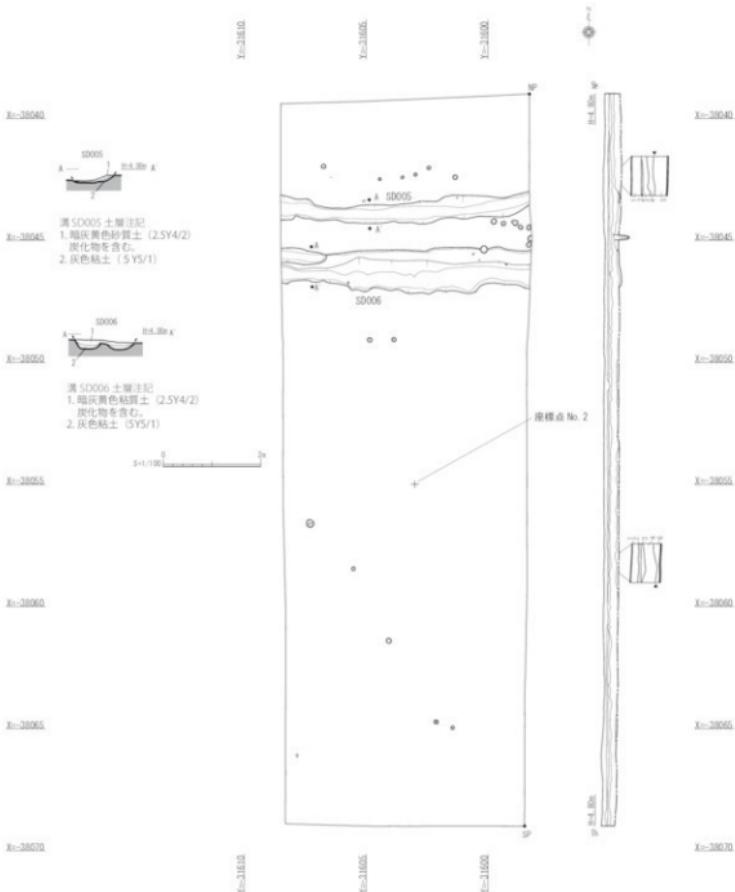


Fig.7 小曾部遺跡2区遺構配置図 S=1/200

## (2) 南詣遺跡 (Fig.8)

### ① 遺跡の概要

南詣遺跡は、宇土半島から延びる丘陵性台地が沖積地へ落ち込む末端部に位置し、南北に大きく張出す丘陵部の迫地状の地形内にあたる。北側に突出する丘陵頂部には「仁王塚古墳」がある。仁王塚古墳は前期様式を有する全長約 50m の前方後円墳である。また、南側に大きく張出す丘陵部には丘陵毎に小規模な古墳群が形成され、大迫古墳群・塚原平古墳群などが広く分布している。

調査区は 1 区～5 区までを設定し調査を実施した。調査担当者は坂口圭太郎で、調査期間は平成 18 年 9 月 20 日から平成 18 年 12 月 28 日までである。遺構調査面は 2 面。

### ② 遺構各説

#### 1区 (Fig.9)

柵列 SA001 直径約 40cm からなる柱穴 4 基が並ぶ柱列。柱間隔は 1.85 ～ 2.21m で主軸は N-50°-E を測る。調査区の隅に位置することから、南側にかけて広がり掘立柱建物となる可能性もある。

溝 SD001 調査区をほぼ南北に横切る遺構。検出長 16.5m、最大幅 1.5m、深度 0.2m。遺構内は一部で段を有し中間端を形成する。断面は基本的には逆台形を呈するが、一部では崩れ、緩やかな U 字状断面を呈する。調査区土層断面図 (A-A') に西端の断面が懸る。遺構東側で中間端を形成している部分で人頭大の礫が入るが、年代を示す遺物等は出土していない。

溝 SD002 溝 SD001 と約 2m 距離を置き並走する遺構。残存全長 6.5m、最大幅 75cm 遺構両端とも調査区内で浅くなり消える。年代を示す遺物等の出土はない。

土坑 SK005 本調査区内では最も規模の大きな土坑状の遺構。長径 1.2m、短径 1.09m、最大深度 65cm を測る。土坑 SK006 の大半を切り、掘り込む。埋土上層より土師器小型甕 (1) が出土している。

土坑 SK007 平面楕円形状の遺構。長径 96cm、短径 81cm、最大深度 21cm を測る。蓋杯 (蓋) (2) が埋土中より出土。遺構の掘り方は他の土坑に比べると垂直に近い。

土坑 SK013 柵列 SA001 の北側に位置する。埋土中より蓋杯 (蓋) (4) が出土している。

不明遺構 SX001・SX002 C-3.4Grid で遺構の約半分を検出。不明遺構 SX001 は長径 2.03m、短径 1.85m、不明遺構 SX002 は長径 3.97m、短径 2.82m を測り、上層から土坑 SK009 ～ 012 を掘り込む。調査時には不定形であるため、不明遺構として認識し調査されている。不明遺構 SX001 が方形に検出されているが、遺物の出土状況、調査時の掘削状況等を勘案すると、不明遺構 SX001 と不明遺構 SX002 の境は明瞭ではなく、大きさは 1 基の遺構として認識できそうである。遺物の出土状況から、土坑状で土器埋納遺構である可能性が高い。上層から掘り込まれた土坑を確認しているが、下層遺構の遺物が混入している。



Fig.8 南詣遺跡全体図 S=1/2,000

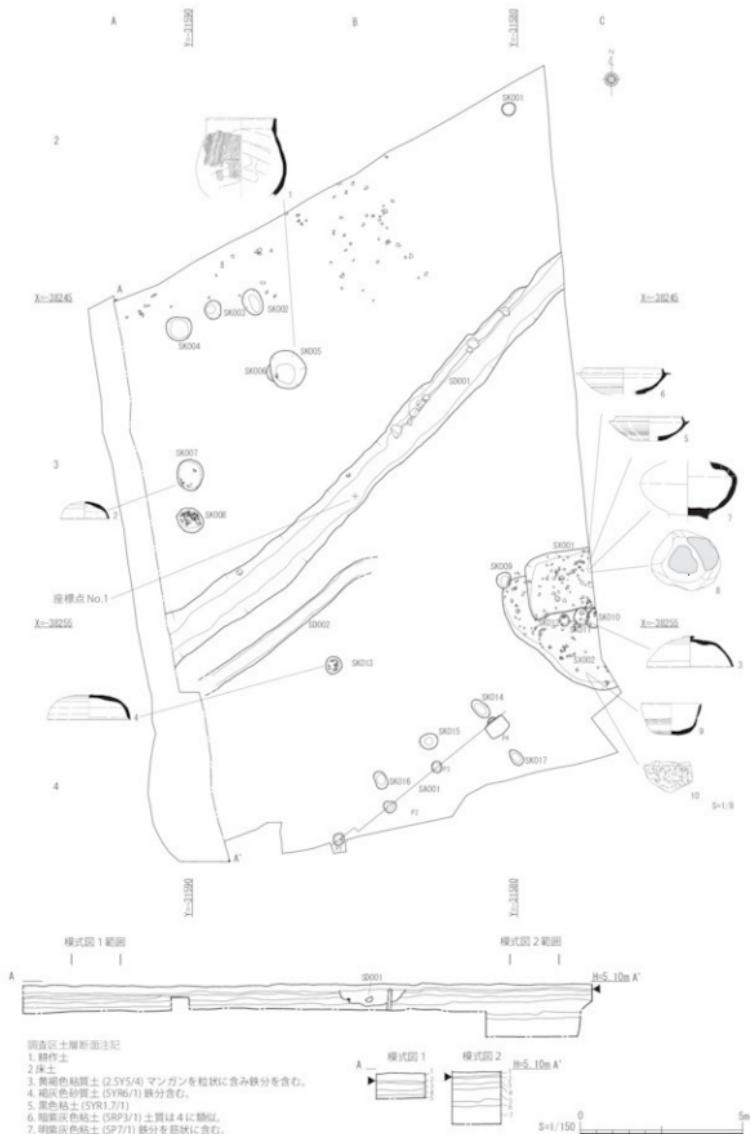


Fig.9 南詣遺跡 1区 古墳後期遺構配置図及び土層断面図

2区 (Fig.10)

溝 SD003 調査区北側から検出し、全長 6.7m で浅くなり消滅している。最大幅は 50cm を測り、断面は緩いU字状を呈する。出土遺物はない。

溝 SD004 溝 SD003 同様、調査区北側から検出し、調査区の約 1/3 を横断し南東方向へと延びる。検出長 11.3m、最大幅 55cm を測る。主軸方向は溝 SD003 とほぼなる。

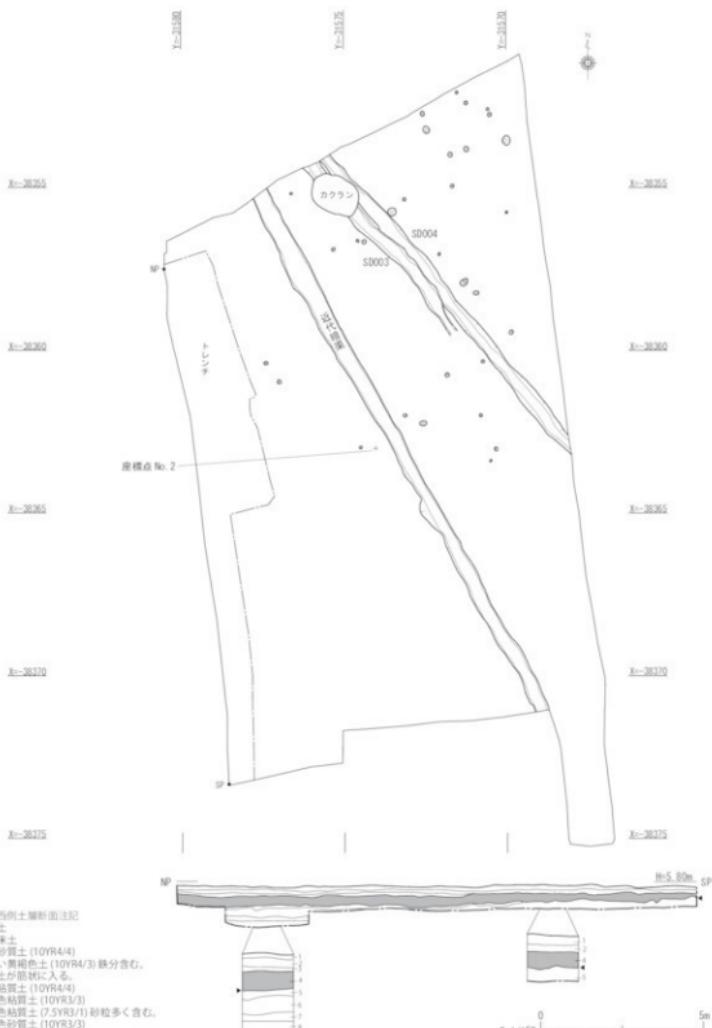


Fig.10 南浦遺跡 2区 遺構配置図及び土層断面図

### 3区 (Fig.11)

調査区を設定し、表土剥ぎ・準点測量を実施した後精査したが、遺構を確認することができなかった。よって、調査区土層断面図を作成し調査を終了している。

### 4区 (Fig.12)

溝SD005 調査区南側から始まり、10mを測る位置で方形の端部をなし終わる。最大幅は 0.65m で、断面は逆台形を呈する。

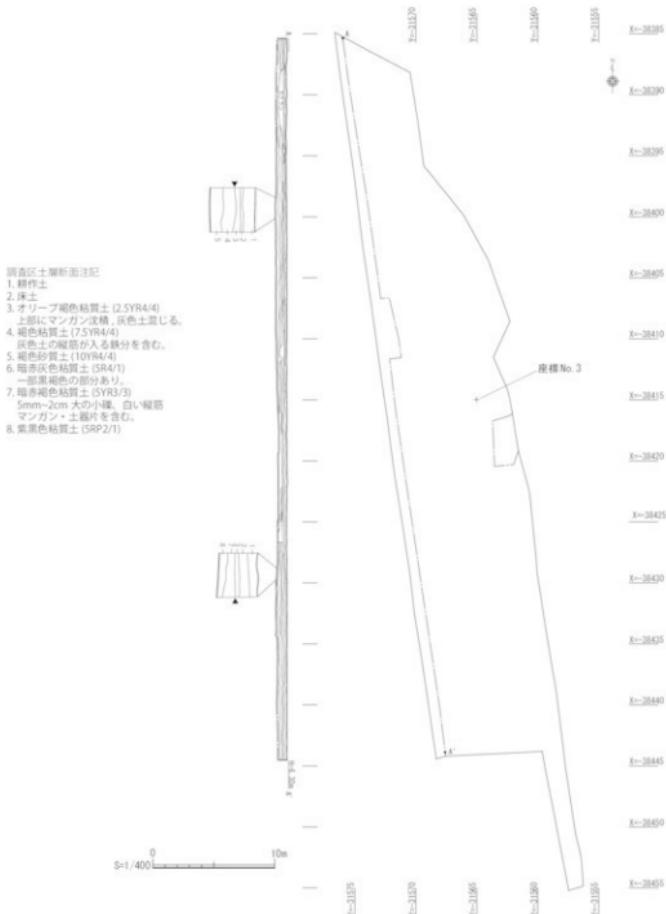


Fig.11 南請遺跡 3 区 全体図及び土層断面図

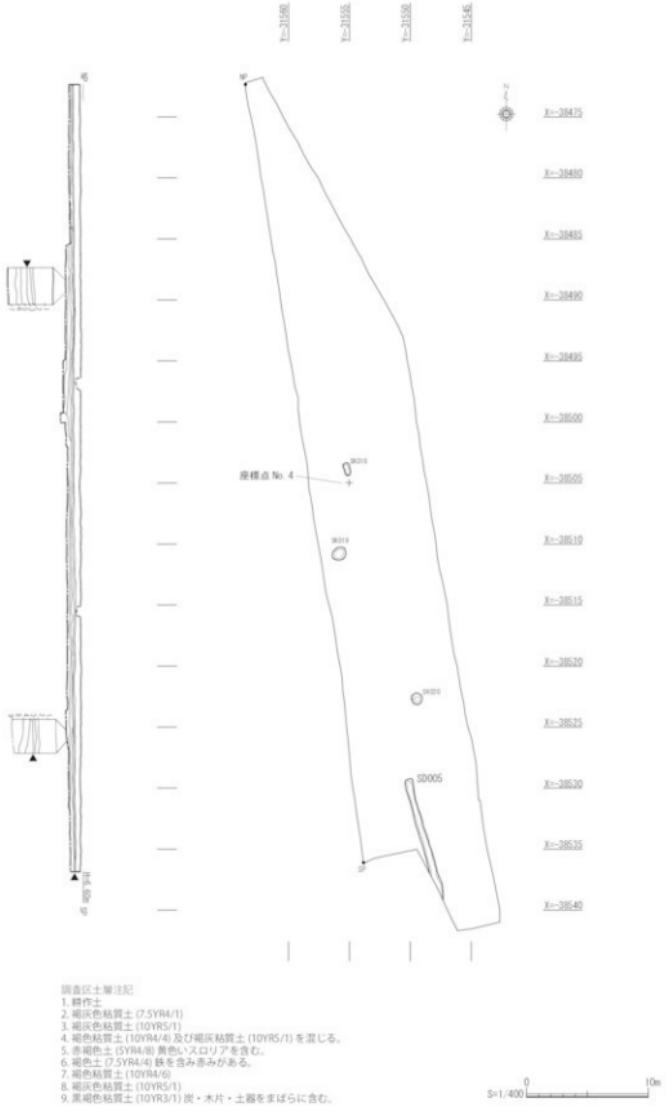


Fig. 12 南諸遺跡 4 区 遺構配置図及び土層断面図

## 5区 (Fig.13)

遺構は5区の中心部に東西に広がるように検出され、南北側には遺構の広がりは見られない。検出した遺構は掘立柱建物、溝、土坑、竪穴建物である。調査時にSB004、SB005と標記され掘立柱建物と認識されていたものは、掘立柱建物と認識するには柱穴径が狭いこと、下端の掘り方が明確に確認されていないこと、下端深度が一定でないことから、柵列（SA）と変更し報告する。また、本調査区で多数検出されている竪穴建物について、遺構規模に変化が見られること、遺物の年代から遺跡の年代を古墳時代後期と考えることができると、この時期周辺の地域では竪穴建物に作り付け窓があつてもよい時期と考えられるにもかかわらずそれら付属施設がないことから、本稿では遺物を出土する竪穴建物を中心に個別で図示している。その他の竪穴建物は全体図を参照されたい。

柵列 SA002 から柵列 SA004 立穴径が 20cm 以下で 3 基の柱穴を基本として検出されている。柵列 SA002 と柵列 SA003 はそれぞれ主軸が N-41°-W と N-59°-W であるが、柵列 SA004 と柵列 SA005 では N-68°-W で並ぶ。しかし、これら遺構がどの遺構に伴うものかは不明。

掘立柱建物 SB001 (Fig.14) 検出段階で竪穴建物 SI010 の上層から掘り込まれるのを確認できていることから竪穴建物より新しい遺構として認識した遺構。規模は 4 間 × 1 間で、柱穴間隔は 1.80m を基本として、1.90m、2.00m とばらつきがある。小口側の柱穴間隔は約 4.5m あり、規模の大きな建物と考えられる。1 基あたりの柱穴径は平均して約 50cm を測り、土層断面で 20cm 前後の柱痕を検出している。

溝 SD006 調査区北東隅から調査区際に沿い検出した遺構。南端部は浅くなり消滅している。断面は逆台形。出土遺物はない。

竪穴建物 SI003 (Fig.15) 4.77m × 3.68m、N-26°-E を測り、平面形は長方形 4 本柱からなる遺構。南側掘り方に土坑 SK039 が掘り込まれる。柱穴以外は竪穴建物の付属施設はない。

竪穴建物 SI004 (Fig.15) 4.36m × 3.20m、N-76°-E とほぼ主軸を東西におく。平面形は長方形で 4 本柱からなり、竪穴建物 SI001 を上部から掘り込む。床面から須恵器蓋杯（身）、無蓋高杯、移動式窓が出土している。

竪穴建物 SI005 (Fig.16) 4.75m × 3.70m、N-21°-E を測り、平面形は長方形 4 本柱からなる遺構。埋土中から摘み付き蓋（23）、脚付杯（24）、杯（25）、土師器甕（26）が出土している。なお、土師器甕は、底部が欠損しているため断定はできないが、壺の可能性もある。

竪穴建物 SI008 (Fig.16) 遺構が調査区際からの検出のため全体規模は不明である。柱穴は 2 基検出しているため、他の竪穴建物同様に 4 本柱からなると考えられる。埋土中より摘み付蓋（28）、蓋杯（身）（29）、杯（30）が出土している。

竪穴建物 SI009 (Fig.17) 竪穴建物 SI003、土坑 SK039 により北側半分以上を、土坑 SK028 により南側立ち上がり付近を切られており、全体規模等は不明。柱穴は、竪穴建物 SI003 下で検出したものも含めると 3 基を検出していることから他の遺構同様に 4 本柱からなる遺構と見られる。埋土中より蓋杯（身）（31）が 1 点出土している。

竪穴建物 SI015 (Fig.17) 多くの土坑、竪穴建物と重複するが、規模は 3.5m × 3.4m のほぼ正方形を呈する。4 本柱を基本として、中心に 60cm 強の掘り込みを有するがを持つ。他の遺構とは遺構平面形の違い、炉を有することなどの違いがある。蓋杯（身）（32）が 1 点埋土中より出土している。

竪穴建物 SI016 (Fig.18) 本遺構も多くの遺構と重複し検出している。竪穴建物 SI015 により最も多く切られるが、4 本柱建物で規模が 3.6m × 3.4m、N-48°-E を測ることができた。遺構埋土中からは、土師器甕（33）が 1 点出土している。

竪穴建物 SI017 (Fig.18) 本遺構も多くの遺構と重複しているが全体形を把握できた。4.37m × 3.97m、N-21°-E を測る。他の竪穴建物同様に 4 本柱を基本とし他の付属施設等は検出されていない。遺構埋土中より須恵器甕（34）が 1 点出土している。

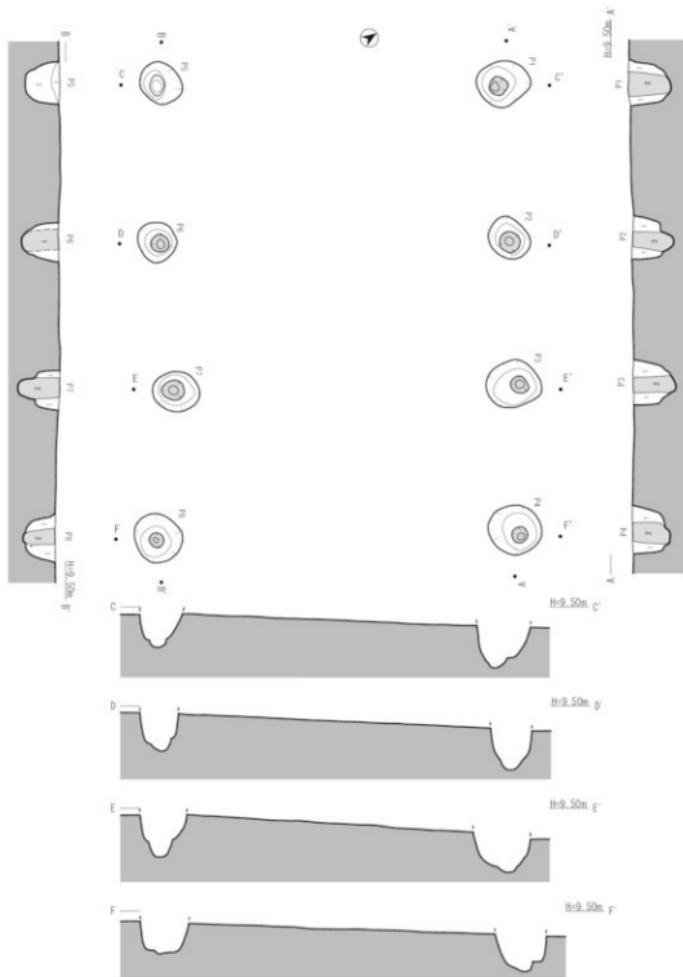


Fig.13 南請遺跡5区古墳後期遺構配置図

竪穴建物 S1018 (Fig.19) 他の遺構との重複により遺構規模は不明。残されている遺構の東側に寄った位置から柱穴が2基検出されていることから他の遺構同様に4本柱建物と見られる。遺構埋土中より高台付杯(36)、土師器壺(35・37)が出土している。なお、(35)は底部の形状次第では瓶である可能性もある。

土坑 SK031 (Fig.20) 円形を呈する遺構で直径0.74mを測る。掘り方は浅く、分層はできていない。埋土中より須恵器高台付杯(38)が1点出土している。

土坑 SK039 (Fig.21) 東西に楕円形を呈する遺構。長径側で1.64mを測る。遺構内には下端付近にこぶし大の礫とともに須恵器壺(39)が1点出土している。



獨立柱建物 SB001 土層注記

- P1, P2  
 1. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/3) 細砂～中砂混じりシルト。炭化物を含む。  
 2. 黄褐色粘質土 (7.5YR3/4) 細砂～中砂混じりシルト。炭化物を含む。
- P3  
 1. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/3) 細砂～中砂混じりシルト。  
 2. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/4) 細砂～中砂混じりシルト。
- P4  
 1. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/3) 細砂～中砂混じりシルト。  
 2. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/4) 細砂～中砂混じりシルト。炭化物を含む。
- P5  
 1. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/3) 細砂～中砂混じりシルト。炭化物を含む。  
 2. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/3) 細砂～中砂混じりシルト。1cm×1cm の黄褐色土をブロック状に含む。
- P6  
 1. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/3) 細砂～中砂混じりシルト。1cm×1cm の黄褐色土をブロック状に含む。炭化物を含む。
- P7  
 2. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/4) 細砂混じりシルト。炭化物を含む。
- P8  
 1. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/3) 細砂混じりシルト。黄褐色土をブロック状に含む。  
 2. 黄褐色粘質土 (7.5YR4/3) 細砂混じりシルト。中砂を多く含み、炭化物を含む。

Fig. 14 南清遺跡 5 区 挖掘柱建物 SB001 平面図と断面図

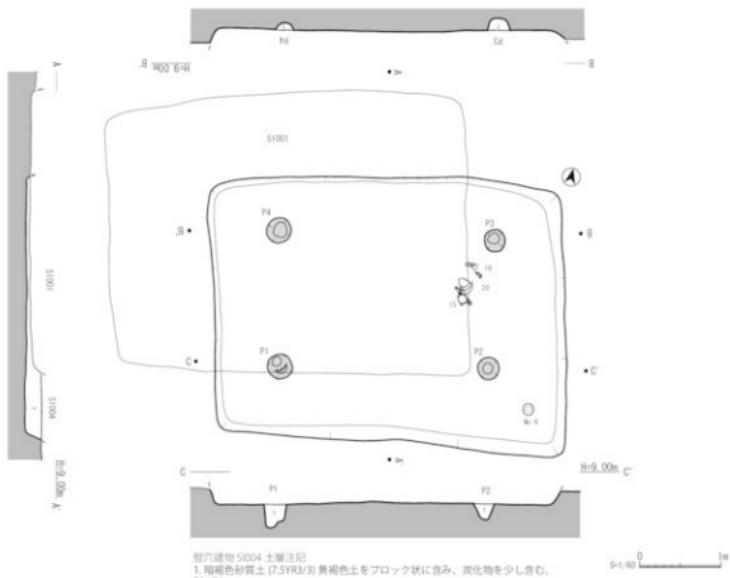
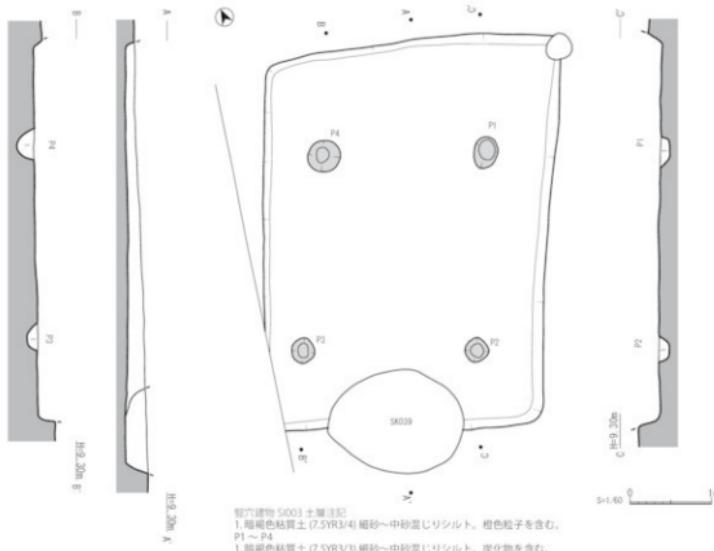


Fig.15 南請遺跡 5 区 壁穴建物 SI003 (上)、壁穴建物 SI004 (下) 平面図と断面図

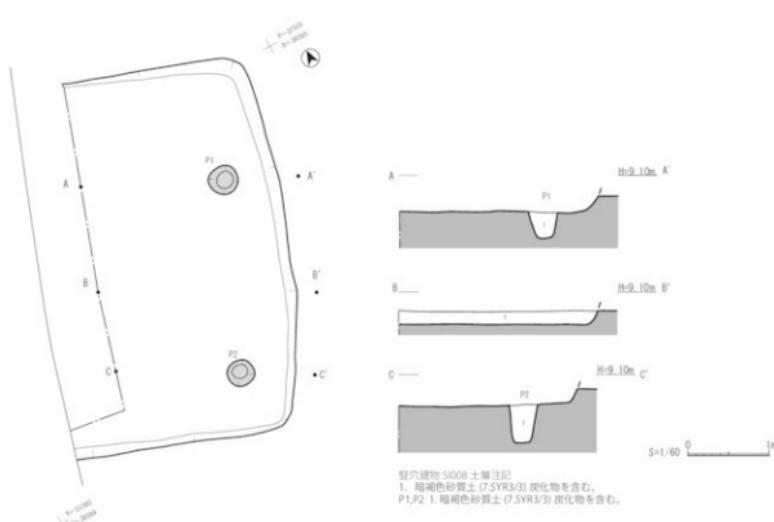
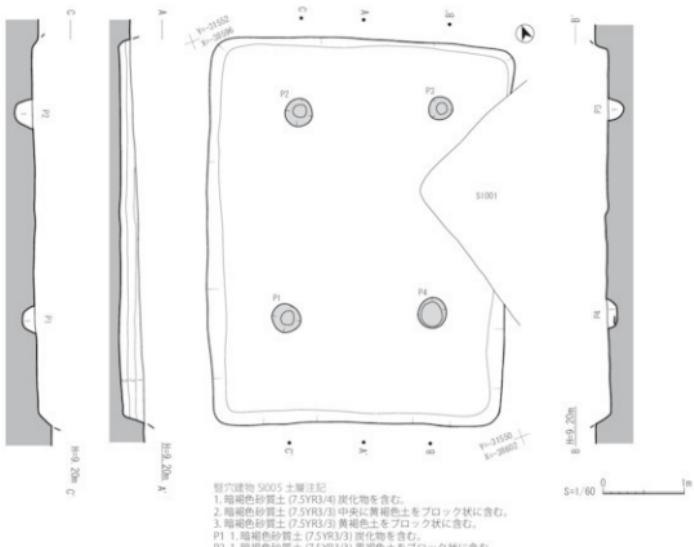
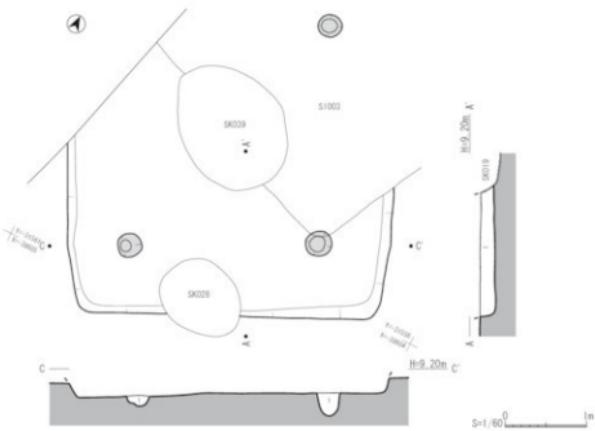
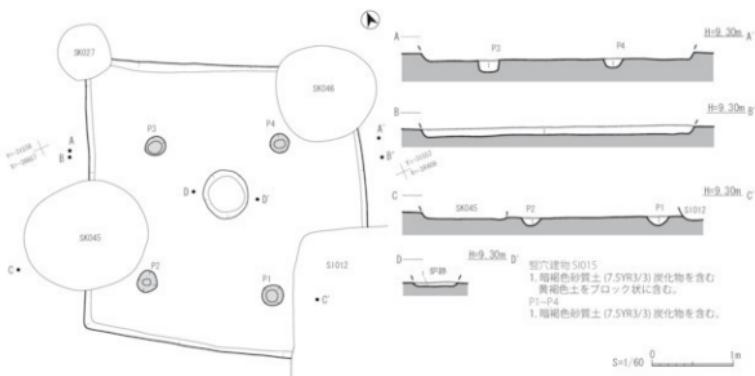


Fig.16 南詣遺跡 5 区 剥穴建物 SI005 (上)、剥穴建物 SI008 (下) 平面図と断面図



堅穴建物 SI009 土層注記  
1. 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 塗化物を含む。  
P1,P2 1. 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 塗化物と焼土を含む。



堅穴建物 SI015  
1. 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3) 塗化物を含む  
黄褐色土をブロック状に含む。  
P1-P4  
1. 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3) 塗化物を含む。

Fig.17 南請遺跡 5 区 堅穴建物 SI009 (上)、堅穴建物 SI015 (下) 平面図と断面図

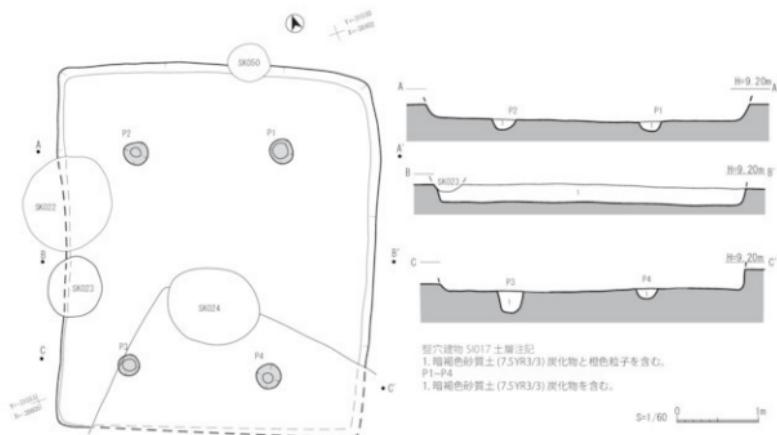
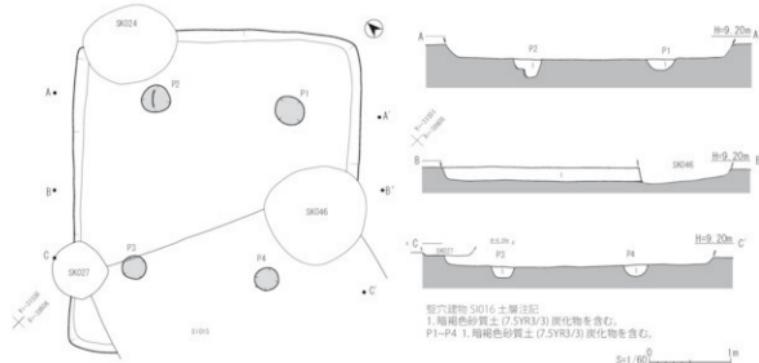
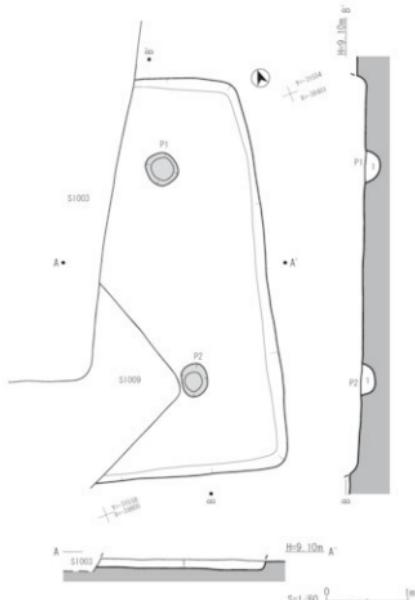


Fig.18 南請遺跡 5 区 壁穴建物 SI016 (上)、壁穴建物 SI017 (下) 平面図と断面図



縫穴建物 SI018 土層注記  
1. 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 漬化物と土器の破片を含む。  
P1,P2  
1. 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 漬化物を含む。

Fig.19 南詰遺跡 5 区縫穴建物 SI018 平面図と断面図

土坑 SK042・SK043 (Fig.22) 楕円形 2 基が重複し検出された遺構。土坑 SK042 (新) → 土坑 SK043 (II) の切り合いを見せる。遺構は 2 基とも長椭円形で、土坑 SK042 で長径 1.6m を測る。遺物は土坑 SK042 でのみ出土しており、蓋杯 (身) (41)、土師器杯 (40)、製塩土器 (杯部) (42) が出土している。

土坑 SK049 (Fig.23) 遺構南北側を遺構に切られるが全体形は楕円形を呈する遺構である。A-A' 部で 1.25m を測る。埋土中から土師器甕 (43) が 1 点出土している。

### ③まとめ

本遺跡の調査結果から、1 区から 4 区は検出した遺構から「小曾部遺跡」と類似する平野上の穀物生産地域の遺構と見られる。5 区は丘陵裾部にあたり、1 ~ 4 区とは違う面上に位置することから生活域として当初から開削を受けたと見られる。

検出できた遺構も竪穴建物を中心とし、出土している遺物も杯類、甕、壺等生活用具であり平野を背景とした居住域と見られる。

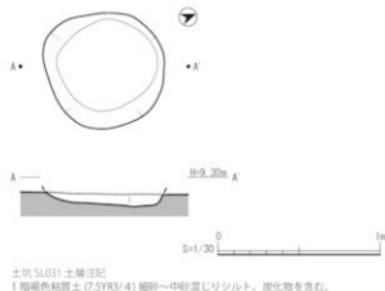


Fig.20 南請遺跡 5 区 土坑 SK031 平面図と断面図

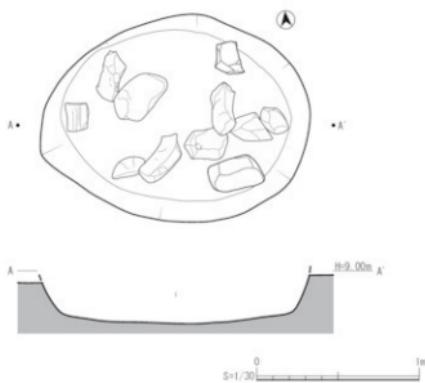


Fig.21 南請遺跡 5 区 土坑 SK039 平面図と断面図

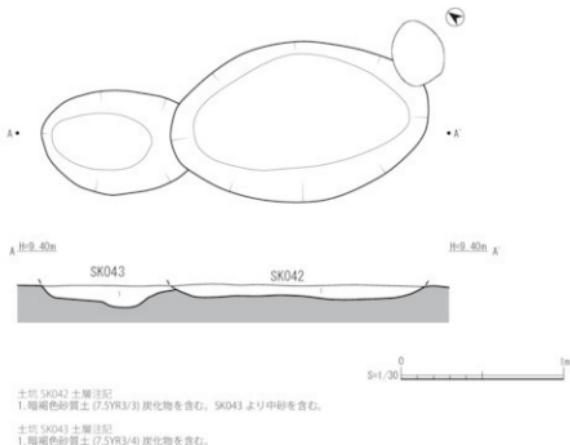


Fig.22 南請遺跡 5 区土坑 SK042・SK043 平面図と断面図

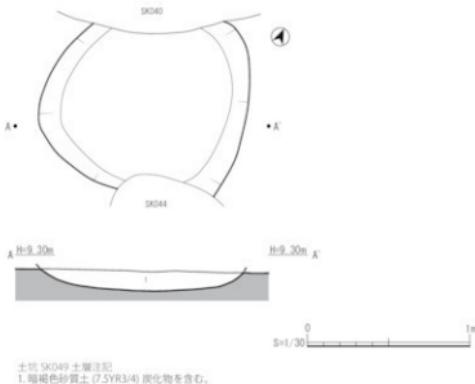


Fig.23 南請遺跡 5 区 土坑 SK049 平面図と断面図

### (3) 高良柳迫遺跡 (Fig.24)

#### ① 遺跡の概要

高良柳迫遺跡は、南請遺跡の南側丘陵北側斜面上に位置し、今回の工事では不知火トンネル熊本駅側坑口付近にあたる。調査区は低丘陵上に存在し、小規模な迫地の最深部にあり平坦地は見られない。それは調査の成果でも段状に切り開かれた地形が確認されていることから、当該地が斜面上に築かれた遺跡であることを裏付けている。

調査区内の遺構は、おおよそ上段に位置する柵列 SA001、土坑 SK001、段下で検出した溝 SD001、溝 SD002 に大別される。ここでは、上段で検出した遺構と下段で検出した遺構とに分けて報告する。

#### ② 遺構各説

##### 上段検出の遺構

**柵列 SA001** 20cm から 40cm を超える規模の柱穴列からなる柵列状遺構。P4 には柱痕があったことを窺わせる段掘りが残る。柱穴はすべて検出面からほぼ同じ深度を測る。全長は 5.54m、柱間は P1-P2 間が 1.20m、P2-P3 間が 1.15m、P3-P4 間が 1.35m、P4-P5 間が 1.17m、P5-P6 間が 0.85m と一定ではないが、同一地形上に並ぶ柱穴列としては違和感のない間隔である。主軸方向は N-30°-W を測る。出土遺物はない。

**土坑 SK001** (Fig.25) 柵列 SA001 の北側に位置し検出した遺構。隅丸方形の平面を呈し、西側に向かい深度を増す。土層は上下 2 層に分層され、埋土には周辺の丘陵で見られる赤褐色系の粘土が入る。遺物は主に下層にあたる 2 層中から出土している。高台付杯（1）土師器甕（2）がある。

##### 下段検出の遺構

**溝 SD001** 上段としている地形が大きくカットされた位置で検出された。遺構の掘削年代は不明。

**溝 SD002** 調査区の北側から南側にかけ検出された遺構。全長 34.6m を測る。北側でやや幅が広がる傾向があるが、ほかは均一な幅で伸びる。遺構検出面上には上段土層 4 層に含まれる大振りな礫が多数広がっており、溝が位置する場所から想定すると、下段が掘削され遺構が掘削された後の上段からの転石と考えられる。特に柵列 SA001 が存在する段面が柵列 SA001 が存在する段状地形から削平を受けていることから、その際に露出、転石してきたものと見られる。遺構埋土からは遺物は出土していない。

#### ③ まとめ

調査区内では遺物が多く集積している 1、2 層に遺物が多く含まれている（4～9）。遺物の多くは古墳時代のもので、埴輪等の副葬品等に用いられる遺物が多く、一般的に集落跡から出土するものとは考えられない。周辺の丘陵上に位置する古墳や石棺から何らかのかたちで出土した遺物が流れ込んだものと考えられる。

また、遺跡から極めて小破片であるが製塙土器挽部口縁部が 1 点出土している。出土位置がはっきりしていないが、多くの古墳時代遺物と一緒に流れ込んできたものと考えられる。

遺跡の性格であるが、上段に並ぶ柵列は丘陵上部に向かい設置されたものと考えられ、また下段に見られる溝は丘陵斜面に平行して掘削されていることから、流れ出る水を排水するためのものと考えられる。上段の形成時期であるが、8 世紀後半の遺物を有する土坑 SK001 があることから、古代には平坦面があったことが窺われる。また、下段は古墳時代以降の遺物を上段からの落ち込み土中に多く含むことから、古墳時代以降に掘削され、さらに上段遺構が形成されたのち上段北側部分を削平するなど、大まかに 2 度の土地の改変を受けていることを調査の結果から窺い知ることができた。

以上の土地改変の想定から、溝 SD001 は成立年代は不明であるが、本遺跡で確認した遺構のなかで最も新しい遺構と判断される。溝 SD002 は上段柵列 SA001 もしくは土坑 SK001 の年代に近い年代を想定する。

(宇田員将・長谷部)

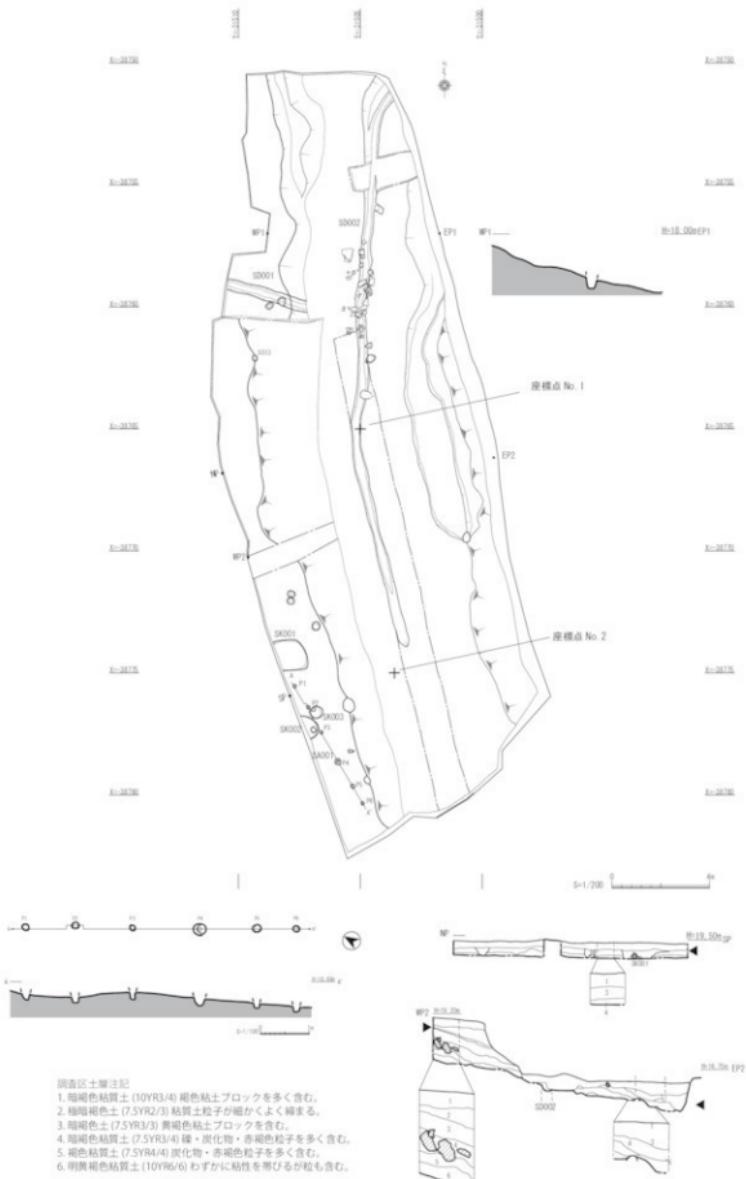


Fig.24 高良柳迫遺跡遺構配置図及び土層断面図

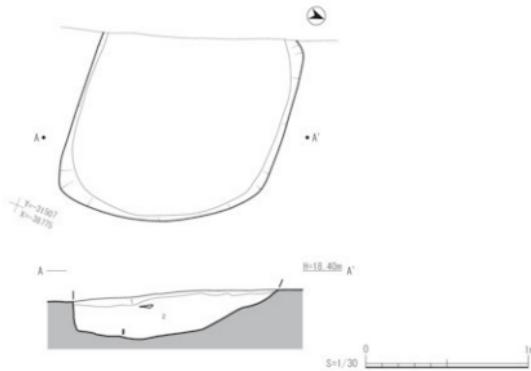


Fig.25 高良柳追跡 土坑 SK001 平面図と断面図

## 2. 遺物

- (1) 小曾部遺跡出土遺物
- (2) 南請遺跡出土遺物
- (3) 高良柳迫遺跡出土遺物

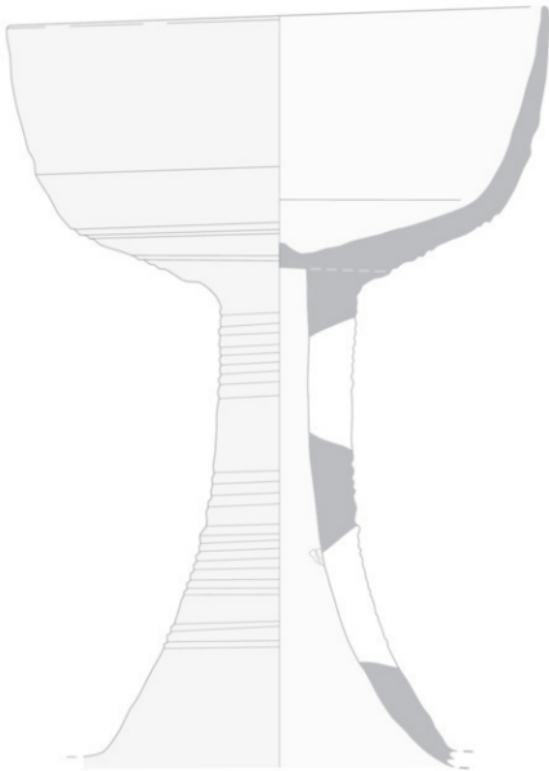




Fig.26 小曾部遺跡 2 区 溝 SK006 出土遺物実測図

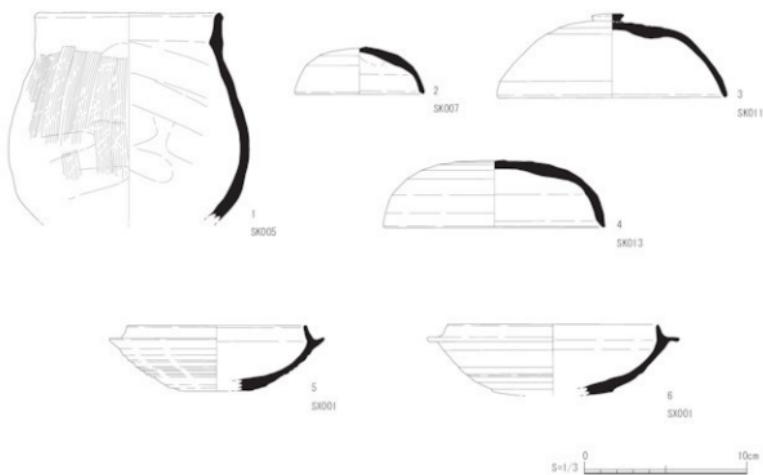


Fig.27 南請遺跡 1 区 土坑 SK005 (1)、SK007 (2)、SK011 (3)、SK013 (4)  
不明遺構 SX001 (4 ~ 6) 出土遺物実測図

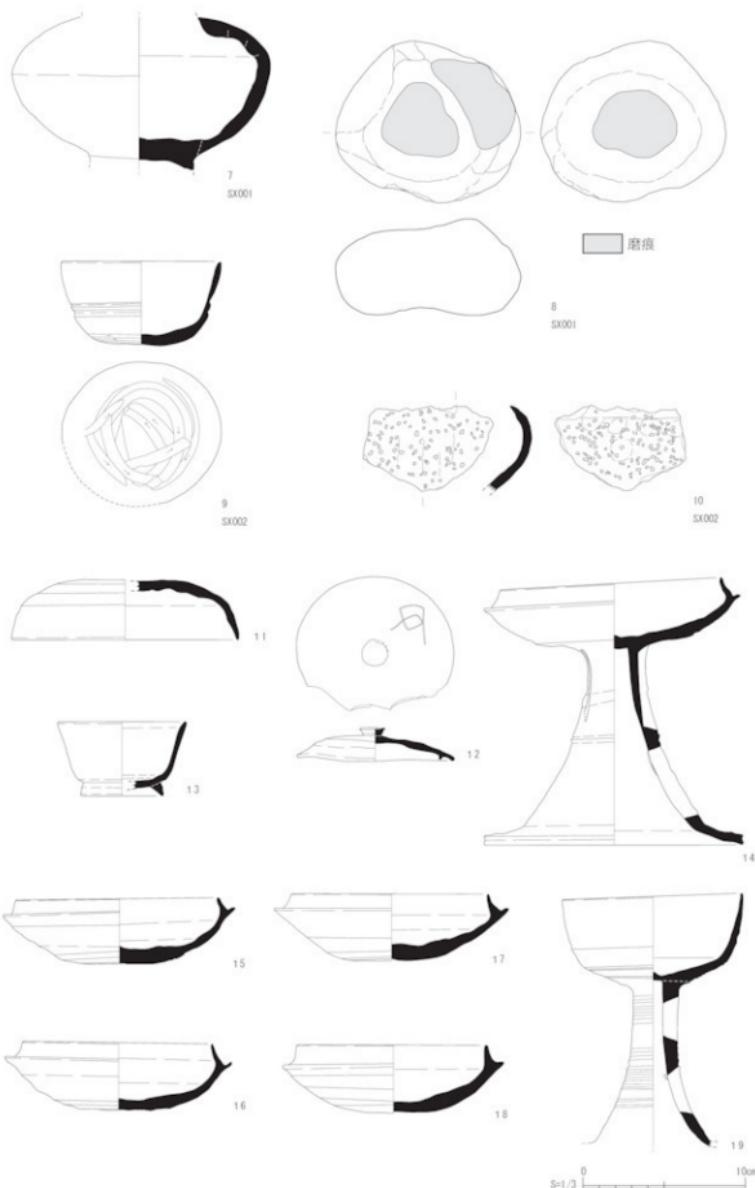


Fig.28 南詣遺跡 I 区 不明遺構 SX001 (7・8)、SX002 (9・10)

5 区 竪穴建物 SI003 (11～14)、SI004 (15～19) 出土遺物実測図

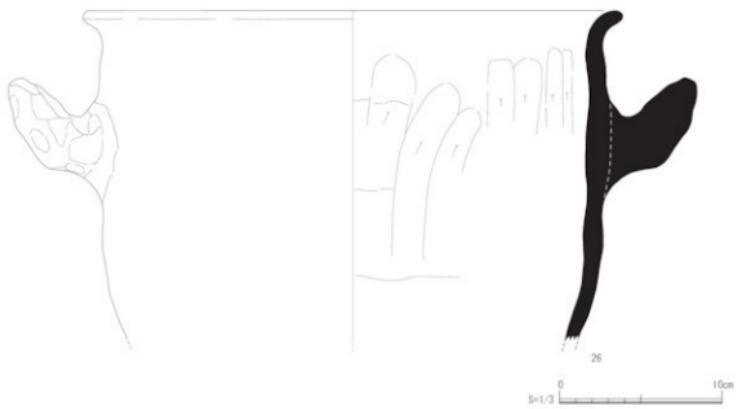
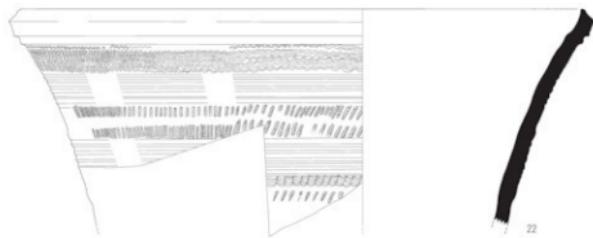
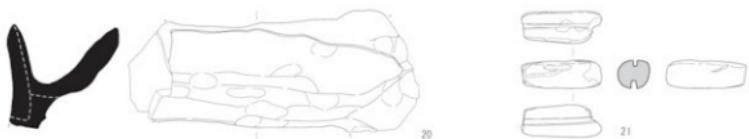
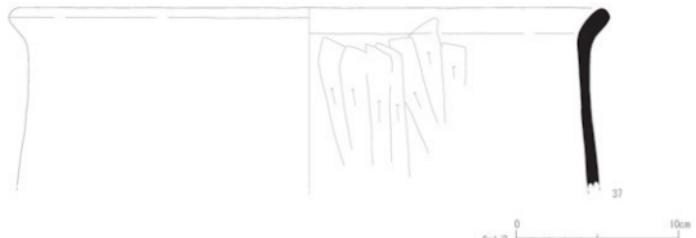
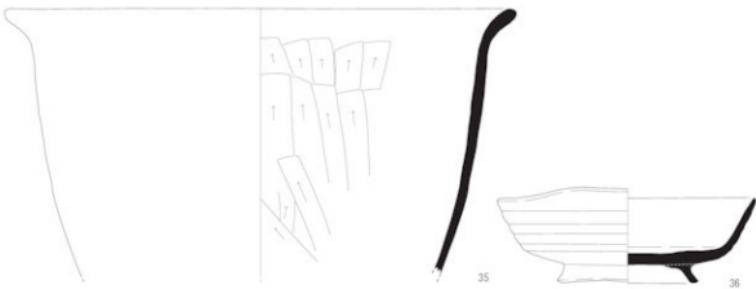


Fig.29 南詣遺跡 5 1区 竪穴建物 SI004 (20 ~ 22)、SI005 (23 ~ 27) 出土遺物実測図



0 10cm  
5:1/3

Fig.30 南詣遺跡 5 区 積穴建物 SI008 (28 ~ 30)、SI009 (31)、SI015 (32)、SI016 (33)、SI017 (34)  
SI018 (35 ~ 37) 出土遺物実測図

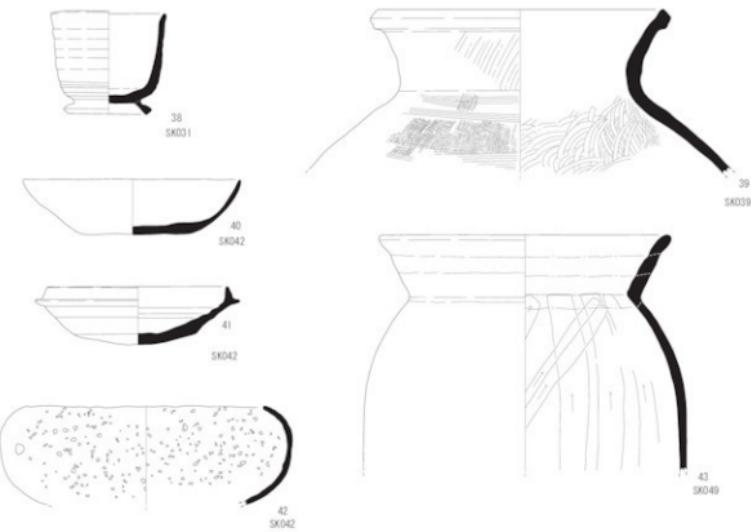


Fig.31 南請遺跡5区土坑SK031(38)、SK039(39)、SK042(40~42)、SK049(43)出土遺物実測図

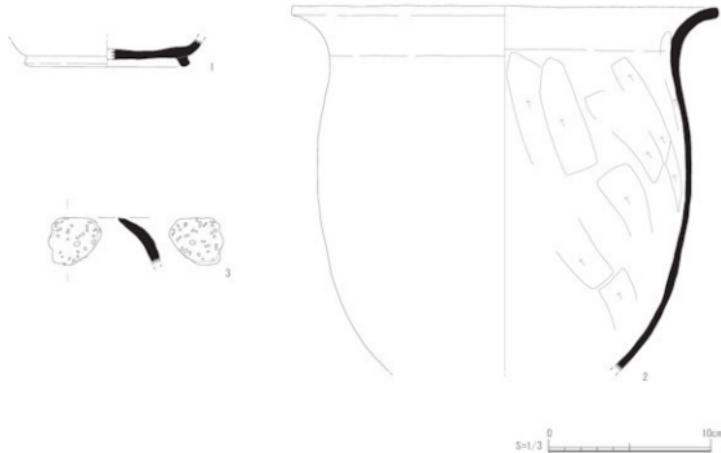


Fig.32 高良柳追遺跡土坑SK001(1・2)、調査区内(3)出土遺物実測図

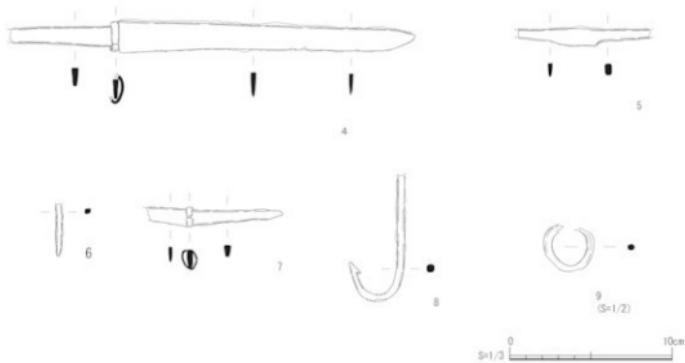


Fig.33 高良柳迫遺跡 調査区出土遺物(鉄器・銅器)実測図

番号	Fig. No.	PL. No.	調査区	地積番号	種別	基準	底土地点		法面(cm)			外因	内因	
							層	注記	口径	高さ	最大幅	残存高		
1	26	7	2区	SD006	消煮器	基材(骨)	層	No.4	—	—	—	—	—	灰 N6/
2	26	7	2区	SD006	石製品	胡蝶車	2層	—	3.4	3.9	0.8	0.8	235(g)	オリーブ墨10Y3/1

番号	Fig. No.	PL. No.	調査区	地積番号	種別	基準	底土地点		法面(cm)			外因	内因		
							層	注記	口径	高さ	最大幅	残存高			
1	27	7	1区	SK005	土耕器	便	1層	—	(11.6)	—	—	12.8	—	胡蝶灰 7SYR7/2	
2	27	7	1区	SK007	消煮器	便	—	No.10	(8.8)	—	—	2.9	—	灰 N7/	
3	27	7	1区	SK011	消煮器	便	—	No.3	14.0	—	—	5.2	—	灰 N7/	
4	27	7	1区	SK013	消煮器	便	—	No.6	(13.5)	—	—	4.1	—	灰 N6/	
5	27	7	1区	SK001	消煮器	便	—	No.29	(13.2)	(4.5)	—	4.1	—	灰 N7/	
6	27	7	1区	SK001	消煮器	便	—	No.23	(15.8)	(7.3)	—	4.4	—	灰 N7/	
7	27	7	1区	SK001	土耕器	耐候性 基材(骨)	—	No.31.11	—	—	—	9.4	—	理 7SYR7/6	
8	27	7	1区	SX002	消煮器	便	—	No.4	9.9	5.4	—	5.2	—	灰 N7/	
10	27	11	1区	SX002	腐殖土器	耐候	—	No.24	—	—	確定 (13.2)	5.3	—	黄灰 2SYE/1	
11	27	8	5区	SK003	消煮器	便	—	P-4	(14.0)	—	—	3.7	—	理 7SY/1	
12	27	8	5区	SK003	消煮器	便	—	—	9.7	—	—	2.1	—	灰白 7SYR7/2	
13	27	8	5区	SK003	消煮器	高台付杆	—	北東	(7.8)	5.0	—	4.1	—	灰白 SY7/1	
14	27	8	5区	SK003	消煮器	無蓋瓦杯	—	北西	(15.8)	(16.0)	—	16.5	—	灰白 2SY7/1	
15	27	8	5区	SK004	消煮器	基材(骨)	—	No.5	14.2	—	—	4.1	—	灰 10Y5/1	
16	27	8	5区	SK004	消煮器	基材(骨)	—	No.8	14.0	—	—	4.2	—	灰黄褐 10YR6/2	
17	27	8	5区	SK004	消煮器	基材(骨)	—	—	14.5	—	—	4.1	—	灰 N5/	
18	27	8	5区	SK004	消煮器	基材(骨)	—	—	13.6	—	—	4.2	—	灰白 N7/	
19	27	8	5区	SK004	消煮器	高杯	—	No.2	(11.8)	—	—	15.5	—	灰白 7SY7/1	
20	27	9	5区	SK004	土耕器	カマズ	—	No.3	—	—	—	7.5	—	理 7SYR7/6	
22	27	9	5区	SK004	消煮器	大便	—	—	(5.6)	—	—	17.8	—	黒褐色 10YR3/2	
23	27	9	5区	SK005	消煮器	便	埋土	3層	—	8.0	—	2.8	—	褐灰 10YR6/1	
24	27	9	5区	SK005	消煮器	耐候杯	埋土	2層	—	11.0	6.3	—	5.1	—	灰白 10YR6/1
25	27	9	5区	SK005	土耕器	便	埋土	3層	No.4	(15.1)	—	—	4.3	—	灰白 10YR7/4
26	27	9	5区	SK005	土耕器	便	2層 北西	No.3	(23.2)	—	—	20.3	—	理 7SYR7/6	
28	27	9	5区	SK006	消煮器	便	—	—	—	11.4	—	—	2.7	—	淡黄 2SY7/3
29	27	10	5区	SK006	消煮器	基材(骨)	—	南西	(14.1)	—	—	3.6	—	灰 SY5/1	
30	27	10	5区	SK006	土耕器	便	—	—	(15.2)	10.0	—	4.9	—	理 7SYR7/6	
31	27	10	5区	SK009	消煮器	基材(骨)	—	—	(16.7)	—	—	2.5	—	青灰 50E6/3	
32	27	10	5区	SK015	消煮器	基材(骨)	—	—	10.4	—	—	3.0	—	灰白 2SY7/1	
33	27	10	5区	SK016	土耕器	便	—	—	(18.0)	—	—	(10.2)	—	理 7SYR7/6	
34	27	10	5区	SK017	消煮器	便	—	北東	15.0	—	—	9.5	—	灰 N6/	
35	27	10	5区	SK018	土耕器	便	—	—	(21.5)	—	—	(16.5)	—	理 7SYR6/4	
36	27	10	5区	SK018	消煮器	高台付杆	北東	(15.6)	8.7	—	5.7	—	灰 SY6/1		
37	27	11	5区	SK018	土耕器	便	—	北	(26.8)	—	—	(11.2)	—	理 SYR6/6	
38	27	11	5区	SK021	消煮器	高台付杆	—	—	(17.0)	(5.4)	—	6.3	—	灰黄 2SYE/2	
39	27	11	5区	SK039	消煮器	便	—	—	(17.5)	—	—	10.1	—	褐灰 5YR6/1	
40	27	11	5区	SK042	土耕器	便	—	No.3	(13.2)	6.7	—	3.4	—	黄理 7SYR7/8	
41	27	11	5区	SK042	消煮器	基材(骨)	—	No.4	12.6	—	—	3.6	—	褐灰 10YR4/3	
42	27	11	5区	SK042	腐殖土器	基部	—	—	—	—	—	6.1	—	淡黄 2SYR7/3	
43	27	11	5区	SK049	土耕器	便	—	No.1	(18.0)	—	—	14.6	—	理 7SYR7/6	

番号	Fig. No.	PL. No.	調査区	地積番号	種別	基準	底土地点		法面(cm)			外因	内因	
							層	注記	全高	全幅	厚さ	残存高		
9	28	1	5区	SK001	石製品	石板	—	No.45	9.7	11.4	—	5.9	108.4	—
21	29	11	5区	SK004	石製品	石板	—	南東	5.0	—	—	26.4	—	オリーブ墨 10Y3/1
27	29	11	5区	SK005	石製品	胡蝶車	—	南西	—	—	—	26.6	—	灰 7SYR5/1

番号	Fig. No.	PL. No.	調査区	地積番号	種別	基準	底土地点		法面(cm)			外因	内因	
							層	注記	口径	高さ	最大幅	残存高		
1	32	12	—	SK001	土耕器	便	上段	—	(26.2)	—	—	(22.5)	—	理 SYR6/8
2	32	12	—	SK001	土耕器	便	2層, 上段	—	—	—	—	—	—	灰理 7SYR4/2

番号	Fig. No.	PL. No.	調査区	地積番号	種別	基準	底土地点		法面(cm)			外因	内因	
							層	注記	全高	全幅	厚さ	残存高		
4	33	12	—	—	刀子	—	—	8.1	1.0	0.4	8.0	—	—	—
5	33	12	—	—	刀子	—	—	3.2	0.35	0.2	1.0	—	—	—
7	33	12	—	—	刀子	—	—	8.4	1.2	1.0	7.3	—	—	—
8	33	12	—	—	刀子	—	—	7.7	3.4	0.5	7.5	—	—	—
9	33	12	—	—	瓦錐	—	—	(個)2.1	—	0.3	0.8	—	—	—

Tab.4 小曾部遺跡出土遺物観察表

地土	外表面	内表面	外底面	内底面	備考	遺物 番号
長石質母	横ナデ、カナリ	横ナデ	—	—	落竹つまみ、斜状細縦列凸起	1
滑石	—	—	—	—	底面に工具による削り目。一部欠損世所があるが元形	2

Tab.5 商船遺跡出土遺物観察表

地土	外表面	内表面	外底面	内底面	備考	遺物 番号
長石・角閃石・雲母 白色酸化鉄	—	—	—	—	—	1
長石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	—	2
長石	—	—	—	—	—	3
長石・石英	回転へラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	—	—	—	4
長石	—	横ナデ	回転へラ削り	—	—	5
長石	回転へラ削り横ナデ、横ナデ	横ナデ	—	—	—	6
長石・石英・雲母 白色酸化鉄	ナデ	ナデ	—	—	底が付し、口縁が剥離している。	7
長石	横ナデ	横ナデ	へラ削り	横ナデ	剥き盛みあり	8
回転・赤赤斑・黒斑 斑白・黃色の砂粒 角閃石・雲母	ナデ	ナデ	—	—	砂粒の大さき 細緻～粗緻	9
長石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ、ナデ	—	—	回転へラ削り後の断面は、石の移動が顯著。	10
長石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ、ナデ	—	—	—	11
長石	—	横ナデ	横ナデ	横ナデ	—	12
長石	—	横ナデ	横ナデ	横ナデ	—	13
長石	（鉛粒）・横ナデ、へラ削り （鉛粒）・横ナデ	（鉛粒）・横ナデ （鉛粒）・横ナデ	—	—	鉛を含み、断面に自然軸付着、鉛粒に2ヶ所附着あり。	14
長石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	—	15
長石	—	横ナデ	—	—	—	16
長石・石英	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	—	17
長石・石英	—	横ナデ	回転へラ削り	—	—	18
長石	（鉛粒）・横ナデ、引き日 （鉛粒）・横ナデ	（鉛粒）・横ナデ （鉛粒）・横ナデ	—	—	鉛粒に2ヶ所附着あり。	19
長石・角閃石・雲母 白色酸化鉄	横ナデ、波状文 鉛突起、鉛突起後ナデ	横ナデ	—	—	—	20
長石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	—	21
長石・雲母	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	鉛盛み	22
長石・雲母・角閃石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	鉛盛み	23
長石・角閃石・長石 白色酸化鉄	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	鉛盛み	24
角閃石・長石・長石 白色酸化鉄	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	粘土巻上げ痕	25
角閃石・長石・石英 鉛粒	ナデ	ナデ、へラ削り	—	—	粘土巻み上げ痕あり	26
長石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	鉛盛み、使ひらあり	27
長石・石英	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	—	30
長石・石英・白色酸化鉄	鉛粒	鉛粒	—	—	—	31
長石	横ナデ	横ナデ	回転へラ削り後ナデ	—	内表面にへラ記号あり	32
長石	横ナデ	横ナデ	回転へラ削り	横ナデ	—	33
長石・石英・角閃石・赤色 酸化鉄	ナデ、ハケ日後ナデ	ナデ、へラ削り後ナデ	—	—	外表面にスス付着	34
長石・石英	ハケ日後横ナデ 平行矢跡と横ハサ目	横ナデ	—	—	—	35
長石・石英・角閃石	ナデ	ナデ、へラ削り	—	—	—	36
長石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	横ナデ	横ナデ	粘付黒苔	37
長石・石英・角閃石	ナデ、鉛粒	ナデ、へラ削り	—	—	—	38
長石	ハケナメ横横ナデ 平行矢跡と横ハサ目	横ナデ	へラ削り後ナデ	横ナデ	—	39
長石・石英・角閃石 白色酸化鉄	ナデ	ナデ	ナデ	—	—	40
長石	横ナデ、回転へラ削り	横ナデ	—	—	—	41
長石・石英・角閃石 白色酸化鉄	ナデ	ナデ	—	—	—	42
長石・石英・角閃石 白色酸化鉄	ナデ	ナデ、へラ削り	—	—	—	43

Tab.6 南浦遺跡石製品観察表

石材	外表面	内表面	外底面	内底面	備考	遺物 番号
—	—	—	—	—	—	8
滑石	—	—	—	—	—	21
滑石	—	—	—	—	側面全体に擦り傷あり 底面と底面に擦り傷あり	37

Tab.7 高良柳泊遺跡出土遺物観察表

地土	外表面	内表面	外底面	内底面	備考	遺物 番号
長石・角閃石・雲母 白色酸化鉄	横ナデ	横ナデ	回転へラ削り後ナデ	横ナデ後ナデ	—	1
長石・角閃石・雲母石英 白色酸化鉄	ナデ、磨耗	ナデ、へラ削り	—	—	—	2
長石・雲母	—	—	—	—	砂赤地、灰白、に少い時、黄灰色の色を多く含む。 40°	3

Tab.8 高良柳泊遺跡鉄器・銅器観察表

地土	外表面	内表面	外底面	内底面	備考	遺物 番号
—	—	—	—	—	—	4
—	—	—	—	—	刃部の錆跡が濃い	5
—	—	—	—	—	刃部先端が欠損しているが他の刃部で錆跡が少ない	6
—	—	—	—	—	刃部部の裏側は1分の2程が欠損している	7
—	—	—	—	—	—	8
—	—	—	—	—	錆斑	9

PLANT

# 写真図版

撮影機材及び使用フィルム  
カメラ リンホフスーパー・ヘリコ  
レンズ Nikon90mmSW、FUJINONW125mm  
フィルム Kodak T-max100、Kodak E100G



小曾部遺跡 1 区完掘状況（南より）



小曾部遺跡 2区完掘状況（南より）



1



2



3

1. 南請遺跡 1 区古墳後期完掘状況（南より）  
2. 南請遺跡 4 区時期不明完掘状況（南より）  
3. 南請遺跡 2.3 区時期不明完掘状況（北より）



南請遺跡 5 区古墳後期完掘状況（俯瞰）



高良柳追遺跡時期不明完掘状況（北より）



1. 小曾部遺跡 2 区溝 SD006 出土遺物 2. 南請遺跡 1 区土坑 SK011 (3)、SK013 (4) 出土遺物  
3. 南請遺跡 1 区不明遺構 SX001 出土遺物 4. 南請遺跡 1 区不明遺構 SX002 出土遺物



南請遺跡 5 区竪穴建物 S1003 出土遺物



1

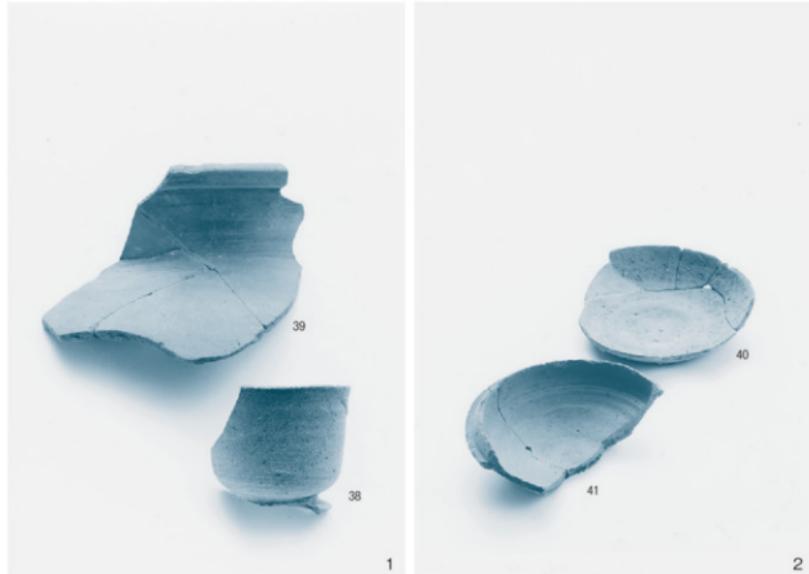


2

1. 南詣遺跡 5 区竪穴建物 S1004 出土遺物
2. 南詣遺跡 5 区竪穴建物 S1005 出土遺物



1. 南詣遺跡 5 区竈穴建物 SI005 出土遺物 2. 南詣遺跡 5 区竈穴建物 SI008 出土遺物  
3. 南詣遺跡 5 区竈穴建物 SI009 (31)、SI015 (32)、SI017 (34) 出土遺物  
4. 南詣遺跡 5 区竈穴建物 SI018 出土遺物



1. 南諸遺跡 5 区土坑 SK031 (38)、SK039 (39) 出土遺物  
 2. 南諸遺跡 5 区土坑 SK042 出土遺物  
 3. 南諸遺跡 5 区堅穴建物 SI004 (21)、SI005 (27) 出土遺物  
 4. 南諸遺跡 1 区不明遺構 SX002 (10)、5 区土坑 SK042 (42) 出土遺物 (製塙土器)



3

1. 高良柳追跡土坑 SK001 出土遺物  
2. 高良柳追跡土坑 SK001 (1)、調査区内 (3) 出土遺物  
3. 高良柳追跡調査区内出土遺物 (鉄器・銅器)

報告書抄録

ふりがな	こそぶいせき みなみうけいせき こうらやなぎさこいせき									
書名	小曾部遺跡 南諸遺跡 高良柳迫遺跡 発掘調査報告									
副書名	九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書									
シリーズ名	熊本県文化財調査報告									
シリーズ番号	第265集									
編著者名	長谷部善一									
編集機関	熊本県教育委員会									
所在地	〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号 TEL:096-333-2706									
発行年月日	2011年(平成23年)3月31日									
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因			
こそぶいせき 小曾部遺跡	熊本県宇城市不知火町大字小曾部字中請 1083-6, 1084-3	057 熊本県	座標数値 No.1 32°39'29.29957" (日本測量赤)	座標数値 No.1 130°39'47.97171" (日本測量赤)	2004.11.1 ~ 2004.12.10	360m <sup>2</sup>	九州新幹線 建設工事			
みなみうけいせき 南諸遺跡	熊本県宇城市不知火町大字小曾部字南諸 1499-1, 1499-2 不知火町	43 009	座標数値 No.3 32°39'11.12095" (日本測量赤)	座標数値 No.3 130°39'48.51022" (日本測量赤)	2006.9.20 ~ 2006.12.28	980.37m <sup>2</sup>				
こうらやなぎさこいせき 高良柳迫遺跡	熊本県宇城市不知火町大字高良柳字志	322 055	座標数値 No.1 32°39'59.76323" (日本測量赤)	座標数値 No.1 130°39'50.85352" (日本測量赤)	2002.9.17 ~ 2002.12.27	286m <sup>2</sup>				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
小曾部遺跡	散布地	古墳・古代・中世	溝・掘立柱建物	須恵器・紡錘車	なし					
南諸遺跡	散布地	古墳・古代	溝・土坑	須恵器・土師器・製塙土器	なし					
高良柳迫遺跡	散布地	古墳・古代	棚棟・溝・土坑	須恵器・土師器・製塙土器	なし					
要約	<b>【小曾部遺跡】</b> 宇土平島東部に位置し、本事業に伴い確認された遺跡。現状の土地利用は水田である。遺跡からは溝が2条1組で検出されている。詳細な時期は不明。									
	<b>【南諸遺跡】</b> 小曾部遺跡同様、沖積平野に位置し、本事業に伴い確認された遺跡。5区で古墳時代後期の竪穴遺構を多数検出している。同時代の遺物に混じり製塙土器（細片）が多数出土している。									
	<b>【高良柳迫遺跡】</b> 宇土平島山塊の末端丘陵裾部に位置する遺跡。前述した2遺跡と遡い丘陵斜面上に位置し、棚列が並ぶ範囲では地形改変を伴い遺跡が作られている。本遺跡でも製塙土器が出土している。									

印刷仕様

- 判型 / A4 判
- 頁数 / 54 頁・A3 折
- 組版 / 写真写植 (13 級 小塚明朝 Pro)
- 製版 / スクリーン線数 220 線で製版
- 用紙 / 表紙 (アートボスト 220kg P P 貼)  
本文 (上質紙 110kg)  
写真圖版 (特アート SA 金藤 4/6 判 135kg)
- 製本 / 左糸綴じ

熊本県文化財調査報告第 265 集  
小曾部遺跡・南請遺跡・高良柳迫遺跡

---

発行年月日 2011 年（平成 23 年）3 月 31 日

著作権所有者 熊本県教育委員会  
発行者 〒862-8609 熊本市水前寺 6 丁目 18番 1 号

印 刷 コロニー印刷



この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 265 集を底本として作成しました。  
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用  
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図  
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用  
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 小曾部遺跡 南請遺跡 高良柳迫遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日